

かなざわ展望

区制施行十周年



1958年

金沢区役所

区制十周年記念

かなざわ展望

金沢区役所

武州金澤澤擲山地藏院能見堂八景之圖

嘉永五年三月日



下目書林菊屋全二
第工

東京寫繪

金 沢 八 景 繪 圖



平
潟
落
雁



野
島
夕
照



内
川
暮
雪



弥
名
晚
鐘

金 沢 八 景

洲崎晴嵐



瀬戸秋月



小泉夜雨



乙船帰帆





金 沢 文 庫



称 名 寺 庭 園



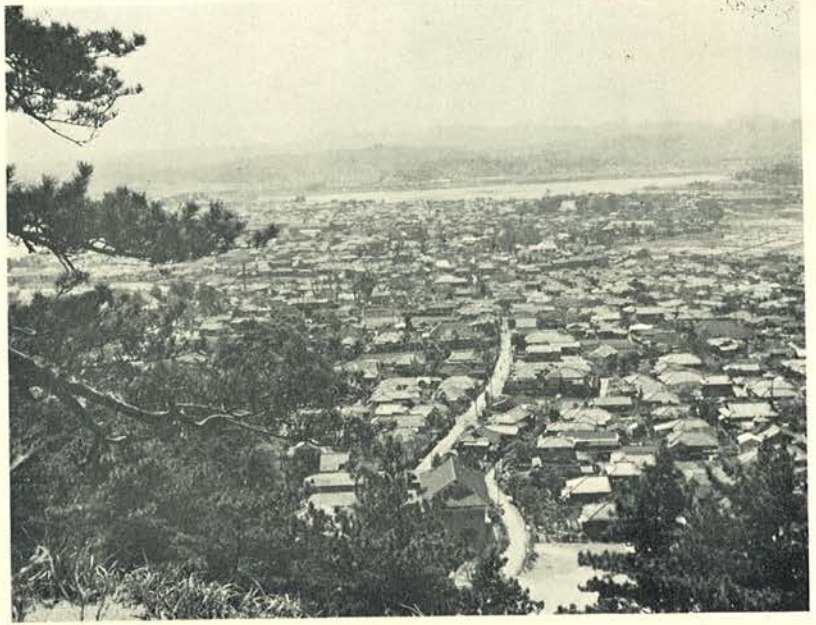
明治憲法起草記念碑及碑文

金澤之為地負山瀕海波光與嵐影相
映自古稱武相篋一之名區伊藤春計
公愛其勝構別墅於夏島將就此而審
議憲法典範之草案屋宇無輪奐之美
柱楹不加雕飾一棟六房纔凌風兩耳
明治二十年三月起工六月落之也公
乃往馬陪從者三人予與金子堅太郎
寓東家井上毅別居公日來臨東家從
事調查予專管機秘草案一夕有偷兒
入予室奪行李而去翌朝覺之百方搜
索偷兒唯取餒而棄行李于圃中草案
則幸無恙矣公乃命二人移居夏島
孤懸于海心非慨舟不可渡居此者宛
如謫客距島數百氏有鳥帽子巖巖以
形名馬時際感夏晨夕討論之暇往往
游泳至巖下其快洵不可名狀也顧夏
島既為憲法發祥之處而物換星移今
則為海軍飛行場併鳥帽子巖無復斤
影滄桑之變足嘆一驚也於是刻文而
誌遺跡以告後人云

大正十五年十月

正二位勳一等伯爵伊東巳代治并書





金沢山よりの展望



野島山よりの展望

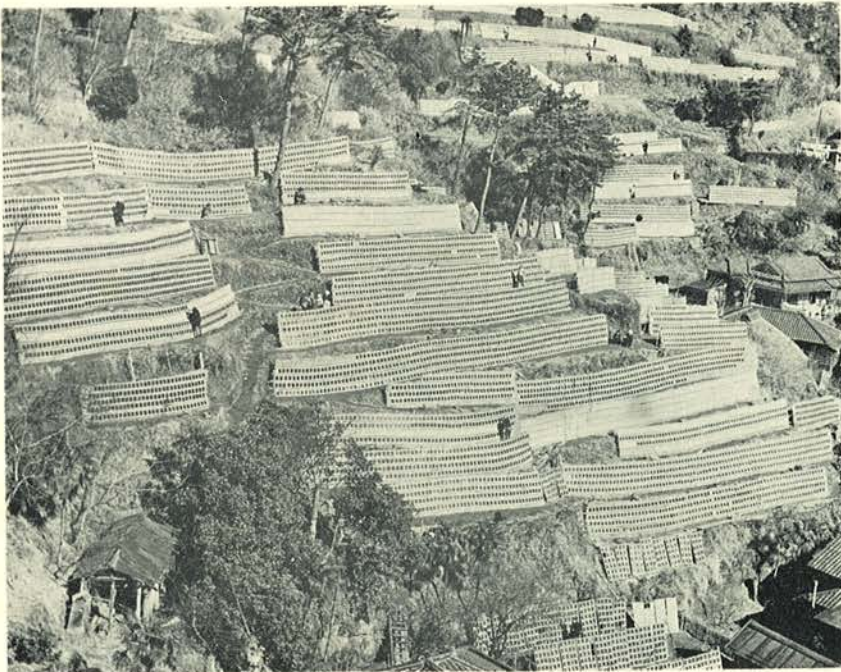
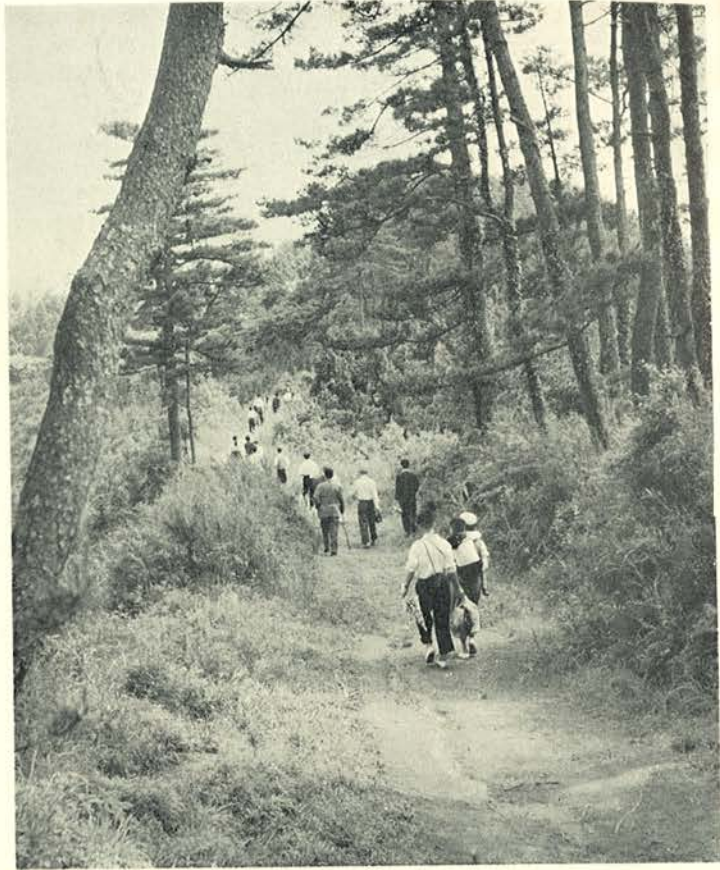


瀬戸神社



称名寺の鐘楼

六国峠のハイキング



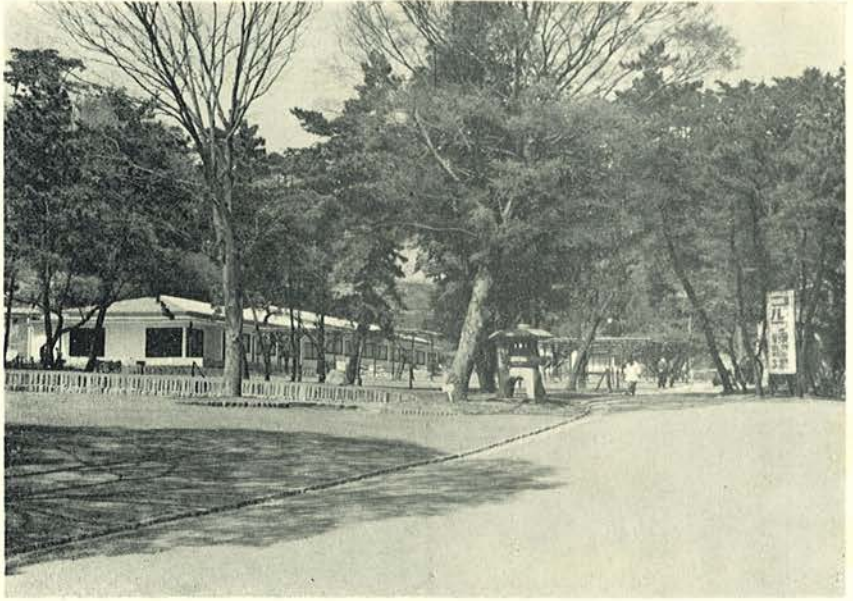
海苔干場風景



夕 照 橋



富 岡 海 岸



温 泉



海 水 浴

「かなざわ展望」の発刊について

金沢区長 新井 助太郎

昭和二十三年五月十五日金沢区が礪子区から独立して、区制が施行されてから早くも本年が十周年になります。

この間、区民各位の理解ある御協力により多くの問題を一つ一つ乗り越えて、今日栄えある記念日を迎えますことは皆様とともに慶賀にたえないところであります。

かえりみれば、古い歴史の中に成長してきた金沢が、時代の推運とともに今日のような発展を遂げた姿は誠に感慨深いものがあります。特に昭和五年八月県立図書館として金沢文庫が設立されてから、称名寺を中心とした古い伝統と、歴史に更に新たな文化の華を咲かせ、日本的な金沢にまで育てあげた先覚者や諸先輩の努力に深い感謝を捧げる次第であります。

ここに金沢区区制施行十周年の意義ある記念日の行事の一つとして、「かなざわ展望」を発刊することになり、公私ともにお忙しいなかを、郷土金沢の昔から現在までの歩みを市立瀬ヶ崎小学校校長花方恒一氏に、観光地金沢の紹介を、県立金沢文庫長熊原政男氏に、それぞれ執筆を願い、更に将来の発展策については、今回一般から応募した多くの懸賞論文中より、区内富岡町在住の鈴木秀男氏のものを掲載して、上梓しました。

従来部分的には、それぞれ文献やパンフレットなどによって紹介済みでしたが、昔から現在にいたり、そして将来への発展にまで一貫して、ここにまとめ、別冊「金沢区勢概要」と合せて区民各位に当区の姿を、広く伝えると共に、今後ますます伸びゆく金沢区政に皆様のよりよき理解と、御協力をお願いする次第であります。

目次

表紙 広金の名作。八景の夜景

口絵 写真

「かなざわ展望」の発刊について

I 金沢のあゆみ

一、貝塚誕生

二、王朝のころ

三、北条氏栄えて

四、足利の世となって

五、泥亀開発前後

六、憲法がつくられたころ

七、ランプから電灯へ

八、躍進の金沢

II 土地のすがた

一、金沢への誘い

二、古い金沢

三、金沢文庫と称名寺

四、金沢八景

五、四石、七井、八名木

六、神社仏閣

七、名所旧蹟

八、金沢の伝説

九、海山の眺め

一〇、新しい金沢

III 新しいのぞみ(金沢区はいかにしたら発展するか)

(一一)

(九)

(七)

(四)

(三)

(二)

(一)

(一)

(一)

(二五)

(二五)

(二六)

(二七)

(二八)

(二〇)

(二二)

(二四)

(二六)

(二八)

(二九)

(三一)

I 金沢のあゆみ

一、貝塚誕生

今から、三、四千年前の金沢は、今とはだいぶ地形もちがいがい、低い平地や山あいの低いところは、海で波がうちよせていたようである。

当時の住民は、飲料水のある近くの小高い所や、海岸の台地を選んで住み、貝、けもの、木の実をとって生活していた。それは金沢区内の貝塚から、発掘された土器や、各種石器、獣骨等が証明している。

この頃は家に死人があると、そのつど転居するのがならわしであったようで、金沢でも方々に遺跡がある。

発掘された貝塚には、夏島貝塚・野島貝塚・釜利谷青ヶ台貝塚・称名寺貝塚・寺前八幡貝塚等で、出土品として、獣骨には、たぬき・猿・猪・鹿等があり、魚骨にはスズキ・ボラ・タイ・サメ・ハンドイルカ等がある。又貝類にはアワビ・カガミ貝・イガイ・アサリ・シオフキ等で、これ等のものと各種の石器・縄紋式土器類などが発掘された。

縄紋式土器の時代がおわると弥生式土器の時代が直接つゞき、この期には大陸から穂が入り、農耕文化が完成し、人々は村をつくり、定住するようになった。然しこの期の遺跡は金沢では発見されていないが、杉田の東漸寺の貝塚や、南区の永田町・東台等その他に発掘されている。われわれの先祖が、大昔金沢の地に、どこからか渡り住み、自然と斗いながら、又自然の恩恵を受けながら、採集生活を長期にわたり、営んできたことは事実であろう。

二、王朝のころ

日本書紀（西暦七二〇年完成）安閑記に『武蔵の国造の笠原直使主が同族の小杵と争い、小杵は上毛野の君である小熊に援を求め、彼を殺そうと謀った。直使主はこの事を朝廷に訴えたため、朝廷は小杵を誅した。直使主はこの恩を感じ、朝廷に横淳・橘花・多永・倉標の四所を屯倉（朝廷の直轄地）として奉った』とある。これが歴史に記録された最初であって、倉標（久良岐）の一部である金沢の地は、朝廷の直轄地として、屯田司が派遣されて管理していた。

久良岐という地名については称徳記に、神護景雲二年六月（西歴七六八年）武蔵国橘人、飛鳥部吉志五百国、白雉を獲たる時奏して曰く、「国号武蔵、郡号久良岐云々」とあり「郡名の古書に見えたはじめ」と新篇武蔵風土記（卷一四一）に記されてある。

都から遠く離れ、草深かつたこの辺は、南向きの台地や、海岸近くに漁、農家があるという、物静かな村々であったようである。

三、北条氏栄えて

源頼朝が鎌倉に幕府をひらくと、鎌倉と府中（東京）とを結ぶ重要な道として、鎌倉道をつくった。なお源氏や北条氏と由緒の深かつた地としての、井土ヶ谷・弘明寺・金沢と鎌倉とを結ぶ金沢道は、將軍、武士、旅人がにぎやかに往来したようで、道もかなり整備されていたと思われる。然しながら、その頃の道は江戸時代の道に比べると、道幅もかなり狭かつたようである。大道という地名は寺分より、朝比奈峠を越して、鎌倉に通ずる要衝の地であった。今その旧道を見ると、三米にすぎない道路が大道という地名を生じたのかと思うと、世の中もかわつたという感を深くする。

そもそも、鎌倉に幕府をひらいた源頼朝が、金沢に目をつけたのは、金沢が景勝の地であつたばかりではない。海上物資の荷上げ地として、海上運輸の発着所として、適当な地であつたからである。鎌倉は直接に太平洋に面し、波浪が高く、海上交通に適当なところでないことは、容易に想像することができる。又当時の調味料として、重要な、塩の産地としても、適当だつたからである。金沢が歴史上有名になつたのは、この時代からである。

このため、源頼朝は一一八五年（文治元年）海上運輸の平穩を祈るために、瀬戸明神を立て、同じころ北条政子（源頼朝の妻）が、琵琶島弁財天を建立した。

又同じころ、文覚上人が頼朝と力を合せて、六浦の山中に淨願寺を立てたり、源範頼（源頼朝の弟）が瀬ヶ崎に薬師寺を建立したといわれている。

一二三〇年三月將軍藤原頼経が、三崎磯山に遊覧したとき、六浦から船で渡つた史実もある。

これ等のことを考えて見ても、金沢が一躍天下の金沢として、注目を浴びるようになったことが、うかがわれる。

鎌倉幕府の門戸としての金沢・又後背地としての金沢は、天然の景勝と相待つて、武士その他の別荘・館・遊覧の地となつた。このため金沢と

鎌倉を結ぶ道路が、特に必要になり、幕府で一二三〇年に鎌倉と六浦間の道路をひらく会議がはじめてもたれ、それより一一年後の、一二四一年に、朝比奈切通しがひらかれて、この金沢道が開通した。

これより約二〇年後の、一二六〇年ごろに、北条実時が称名寺を立て、十数年後に邸を立てて、別荘の地としている。又多くの書籍を集め、天下の学者を招いて、学問の研究にはげんだのである。これが金沢文庫の創立で、金沢は当時の第二の政治の中心であり、文教の中心地となった。実時の死後、北条顕時もその志をつぎ、称名寺の改修増築工事をなし、金沢文庫及び称名寺の充実をはかった。

当時のやしきは、今の金沢文庫の所にあり、文庫は山で距てられた今の公民館の所にあつて、トンネルで連絡していた。これは貴重な文庫を、火災から守るために、特に他の建物とはなして、安全な所に立てたものと考えられる。

次にこの時代起つた事件のうち、金沢に関係したものは、源範頼が兄頼朝に追われて、瀬ヶ崎の栗師寺（太寧寺）で自殺したと伝えられるほか、一二〇五年（文久二年）時の執権北条義時が、畠山重忠父子を討ち、釜利谷の六郎ヶ谷（トンネル附近）にその墓がある。このように、鎌倉を中心とする幕府内のみにくい斗争の場所として、この金沢の地が関係していることがよくわかる。然しこの血の記録を通じて、この土地の重要性を知るとともに、三浦一族の乱が起つた当時に、すでに六浦荘と呼ばれ、北条実時の領地であつたのである。

さきに述べた藤原頼経のことをもう少し詳しくふれてみると、源 一代で、その直系が滅んだ後、京都より藤原頼経を將軍として一応迎え、北条氏は執権として、政治の実権を握つた。その將軍である藤原頼経が、一二二八年、この地に遊覧し、再び一二三〇年三月に遊覧された。その頃は桜花満開で、領主駿河前司が案内し、北条一族が同道して、六浦より船に召され、海上管絃にぎやかに、連歌も催され、一同秀句を詠まれたとある。想えば当時如何に盛大に、京の都の公家を中心に、北条一族が我が世の春を謳歌したかをうかがうことができる。

四、足利の世となつて

足利持氏が関東管領になつた頃は、鎌倉幕府の管理下にあつた金沢文庫・称名寺・瀬戸明神等の維持経営が、次第に困難になつてきたようである。然し足利尊氏は、関東一円を統治するために、一三四九年（正平四年）に、その子基氏を管領としたので、当初はこの地の文化が急激に衰微することはなかつた。

時代のながれは、産業の發達と、この地の入海の漸進的な退潮という現象と結びついて、塩場が各所につくられていった。塩田を利用した製塩

は、一九一〇年（明治四三年）の製塩整理の法律（明治三八年公布）ができたのちまで、実に六〇〇年の長きにわたってつゞけられたのである。

この塩こそ、金沢の歴史の一つの特長といえよう。今更いうまでもなく、塩の重要性は、今次大戦で我々がつぶさに、経験したとおりで、生活必需品として、欠くことのできないものである。

当時幕府は、塩座を設け、一種の専売制度をとって、特定の商人にのみ売らせた。又その生産配合に注意し、年貢はこれをもって、納めさせたとも伝えられている。この塩場が各所に増えてきた事実は、入海が次第に、遠浅になつてきたことを意味するが、当時はこの地は港として房総へ便船が、発着していたことが、この時代の作である謡曲にも、しるされている。

さてこのようにして、関東管領足利基氏・氏満・満乗と、父子代々相ついで、持氏の時代になると、六浦大道（常福寺門前）に関所をもうけ、人は二文、馬は三文の通行税をとり、称名寺造営のための費用とした。

又鎌倉幕府当時に、その権力下にあつた称名寺・文庫・瀬戸明神その他の建造物も、そろそろ修理を必要とする時期になつてきた。然し、そのつど、改修する力もなくなつて、文庫は称名寺に移され、貴重な蔵書もうしなわれはじめた。

このような時に、管領は、その執事である上原憲実と意があわず、軍をむけて、これを討とうとしたが、このことは逆に、將軍足利義教との不和をたかめ、幕府はたくさん兵を、さしむけて、持氏をせめた。持氏はやぶれて、金沢の称名寺ににげた。こゝで入道となり、翌一四三九年に父子ともに自殺した。

幕府は持氏の末子を成氏と名のらせて、管領として鎌倉におくつた。この同族の争を世間では、金沢の合戦とよんでいる。

このころより、関東一円はもとより、全国はようやく乱れのきざしをみせて、戦国争乱の世になつていった。

北条早雲が伊豆を占領してから、次第に勢力を北の方にのばし、一五六〇年・北条氏康・氏政父子が、金沢文庫の蔵書「文選」（宋の時代）に出版されたもの」を足利学校に寄附した。

金沢も北条実時：顕時の時代を最盛期として、次第に衰微していったことがうかがわれる。豊臣・織田の頃も足利の末期に等しく、遠くはなれた金沢の地を昔のようにかえりみることはできなかった。ためにせつかく建立された造営物も、荒れほうだいになり、見るかげもなくなつてしまつた。豊臣秀吉は一五九〇年に、乱暴・狼籍・放火の禁止令を出して、称名寺や寺の前のあらされるのを防いだ。

五、泥 亀 開 発 前 後

徳川家康が江戸に幕府をひらくと、江戸の近接地としての、重要性もあって、代官をおいて、おさめさせた。しかしながら、金沢の地は、東海道が通らないので、へんびの地として、以前のにぎやかさもうすれだんだんさびれていった。

当時の村のようすを、新編武蔵風土記からひろってみると、つぎのようである。

(1) 社家分村・寺分村・平分村

江戸日本橋から一二里余りの所にあつて、戸数は社家分村六〇軒・寺分村三二軒・平分村一四八軒で、三村とも水田も陸田も同じくらいある。日でのりのため、作物のできないことが度々ある。又湖水があふれて、心配のこともあるが、村の中に塩浜があつて農業のひまに、塩を作つて特別の収入をえたり、ある者は漁業を営んでいる。

(2) 洲崎村

戸数は一〇八軒で、土地がたいらで砂地である。用水は谷々から清水をひいたり、雨水をためておいて使っている。陸田に比べて水田の方が多いが、日でのりのため作物がとれない時もあるが、もっとおそろしいことは、津浪のために、田畑や人家が流されることである。農業のひまにあさりをとつて売りに行き、生活のたしにしている。

(3) 町屋村

人家が軒をつらねてたちならび、にぎやかである。町屋という名前は、これから出たのであろう。戸数は六〇軒位で遊覧にきた者は、多くこゝに宿をとつたので、村は人々にぎわつて、商店もたくさん立ちならんでいた。

(4) 寺前村

戸数は七五軒で、水田が多く陸田は少い。水が出たり、日でのりのための心配はない。しかし津浪に時々おそわれた。村民の多くの者が製塩業にたづさわっていた。そのほか薪を生産して、生活をたてゝいるものもある。

(5) 谷津村

戸数は二〇軒で、水田と陸田が半々である。谷水を用いているが、日でのりの時はこまつた。あらまし農にたづさわっているが、そのひまに薪をとつて、塩焼き場にもつていって売つた。

(6) 柴村

戸数は五〇軒で、水田と陸田が半々くらいある。水害や日でのりの心配もあり、時々その苦勞にあつた。

(7) 富岡村

所々に散らばって、八五戸の民家がある。水・陸田が半々のようだが、陸田の方が少し多いようである。海のはづれを運って、杉田村に出る道があるけれども、潮が一ぱいになると、往来することができなくなった。農業のひまに薪をとったり漁に出かけたりした。

(8) 宿村

この土地を宿村というようになったのは、鎌倉時代に宿場や馬のつなぎ場があつて、古くからひらけたところである。戸数は八一軒で、陸田が多くあつて水田は少ない。水に恵まれない所で、日でのりのため、時々その害をうけた。農業のひまに、薪をとって、町屋や洲崎の塩焼き場にもつていつて売った。

(9) 赤井村

民家は七〇軒で、山の間水田を作り、山の上に陸田をきりひらいた。水田も陸田も同じくらいある。用水は宿村の溜井より引いて、使つてゐるが充分でなく、日でのりのためになやまされた。暇をみて薪をとつて生活のたしにした。

(10) 坂本村

民戸三六軒で、あちらこちらに散在している。二俣川の水を用水としているが、不便で日でのりの時はこまった。ひまの時には薪をきり出し、町屋村へ売りに行った。

以上のようにあるが、谷津村・寺前村・洲崎村・社家分村・平分村・寺分村等を概して金沢と言ひ、社家分村・平分村・寺分村を六浦郷又は六浦荘といつてゐる。

又宿村・赤井村・坂本村の三村を釜利谷郷といつてゐた。

江戸時代になると金沢は文教の地というよりは農業・製塩の聚落となつてゐた。

金沢文庫の蔵書も一六〇二年に、徳川家康が、江戸の富士見亭文庫に持ち出すようになって、益々少なくなつてゐた。然し、水田の少ないこの地は、各所に長年月にわたり、新田がつくられたのである。

一六六八年永島祐伯(号は泥亀)が走川および平潟の二ヶ所に、新田を開いて、塩田二町歩、田一五石を得た。これが泥亀新田のおこりである。

つづいて、一七八五年、永島段右衛門が、勘定奉行の岸彦十郎のゆるしを得て、金沢入江新田の埋立工事をはじめ、翌一七八六年に、一応完成し、泥亀新田と名づけ村にした。この新田も、この後幾回もの、洪水津浪等に破損をうけ、完全にでき上つたのは数十年後の、一八四九年永島

(九代)段右衛門忠篤の時である。この間といえども、代々の永島家は、この埋立工事の補強改造に尽した。又一七八三年寺前村の山田某が、谷津にあった塩田を埋立て大沢新田をつくった。

一方徳川幕府の中央集権による地方封建化は着々と基礎をかため、一七二二年、米倉丹後守忠仰(ただすけ)(はじめ保教やすのりという)が下野国皆川から、金沢の陣屋に移り一万二千石を領した。

金沢は昔より用水に恵まれなかった。水陸田があつても、常に旱害になやまされ、切角の労苦も水泡に帰する事がしばしばであった。特に飲用水が珍重された。鎌倉の十井五水もそうであり、この金沢も鎌倉時代には大鎌倉の一部となつて、鎌倉要害の地として、食塩製造の地として、又船舶発着の地として、又遊覧の地として、一大発展をしたが、海岸地方の通弊として、清水を得ることが、非常に困難であつたために、少しでもきれいな水が湧き出すと、それが一つの名水として数えられ、所謂金沢の七井が出来上つたものである。

金沢の七井、又は五井ともいわれている。その七井の名称は

1 御中井、2 亀の井、3 染の井、4 白井、5 赤井、6 御中井、7 荒井、の七井で、その中で現在使用されているものは1、2、3、5、7の五井であるから、しぜん五井の名まえもできたのであろう。

六、憲法がつくられたころ

明治維新の新政は当然この金沢の地にも変化をもたらした。先づこれを行政関係からみると、版籍奉還によつて六浦・釜利谷及び金沢の一部をその領地として、六浦藩と呼ばれた藩主の米倉氏は、この地の知事となり、廢藩置県によつて六浦県になった。その後一時葦山あしやま県に属した柴村と共に、一八七一年(明治四年)すべてが神奈川県の管下になり、陸奥宗光が知事となった。

そして翌年六浦・釜利谷及び峠の各村は、五月に連合して正副の戸長をおいて、村政を掌った。又金沢・富岡方面も八ヶ村毎にそれぞれ正副の戸長をおいて、同様に村政を執行した。

その後各々共に連合したり、分かれたりしていたが、一八八四年(明治一七年)七月には、再び六浦方面も連合し、金沢方面も八村連合して、各々一つの戸長役場を置き、その翌年には村会を設け、一八八九年(明治二二年)四月町村分合改称令にもとづき、既に六浦三ヶ村は三分村、釜

利谷三ヶ村は釜利谷村と改称されていた二村が、併合して六浦荘村となり、峠村は東鎌倉に合併し、金沢方面の八村も併合して金沢村となつて久良岐郡の一部となつた。そして一八九七年（明治三〇年）五月、峠村は再び六浦荘村に編入された。

以上が明治年間の行政区画の変遷であつて、当時の人口は明治初期（各村の記録が同一年でないが）には一、一六二戸・六、九五五人であつたが、一八九七年（明治三〇年）には一、二五三戸・八、三二四人になつた。

教育に關係したことは、中央で学制の施行された一八七二年（明治五年）の翌年の明治六年に、富岡・三分・洲崎・赤井・小柴などに郷学校又は学舎がそれぞれできたが、一八七六年（明治九年）に洲崎の知足学舎が寺前村に、金沢学校と名を改めて新築され、その後三分学舎は三分学校として、富岡郷学校も富岡学校となり、おのおの校舎を新築し独立の上、政府の方針にそつて発足した。郵便のことについては、一八七二年（明治四年）郵便規則が制定された年に、早くも横浜・横須賀・浦賀・三崎・金沢の間に郵便がはじめられたが、普通郵便の集配局として、洲崎に、武蔵金沢郵便局ができたのは、それから十数年後の明治二十一年であつた。

又中央では一八九〇年（明治二十三年）電話交換局が設立されたが、金沢郵便局が、電信・電話の通信事務をはじめたのは、一九一一年（明治四四年）であつた。

このようにして、明治の文明開化の影響は、決して中央に比べて早いというわけではないが、金沢の地が古くからその名勝と、金沢文庫を有することに対しては、当時のあわたましい時代の流れに、誰からも忘れられたと言ふ訳ではなかつた。

横浜が開港され欧米の外人が横浜に居住しはじめてから、江の島・鎌倉とともに来遊の客もあり、一八六五年頃には、その遊歩道路も完成し、外人専門の休憩所が設けられ、ミルクホールもできたほどである。政府の高官も横浜より船を利用するなどして、しげく金沢の地に足をはこんだものである。

特に帝国憲法と伊藤博文・伊藤博文と金沢は「夏島草案」と呼ばれるほどゆかりが深く、天下既知の事実で、あえてこゝにのべる必要はないが、記録によれば、博文が憲法調査のため渡欧し、帰国後、制度取調局長官となり、井上毅・伊東己代治・金子賢太郎の三人の協力で、草案を作成し、一八八八年（明治二十一年）六月より、洲崎の東屋旅館（最近まであつた）で、七月末日まで種々会談が行われた。その後、前年夏島に建てた別邸で審議して、明治二十二年に發布するに至つたものである。

このようにして、内外有名人の避暑避寒の別荘地として、歓迎されたむきが多く、その場所も富岡・野島に多くみられ、特に富岡には当時にしては新式な、株式経営による旅館もでき、水着をつけた海水浴に地元の人々が奇異の目をみはつたのも無理からぬことである。しかしながら交通

機関のおくれたこの地は、交通便利な鎌倉や湘南地方にすっかり押されてしまった。

六浦・逗子間の道路を改修して、トンネルをつくったのは、明治三年で金沢・杉田の道路の改修による、富岡のトンネル開通は、明治四〇年であったことを思えば、金沢の交通の開発はおそきに過ぎた感を深くするものである。

産業方面では一八八〇年（明治一六年）海苔の養殖場ができ、おかれて内務省勸農局が「かき」の養殖を試みはじめ、その後明治四二年に再びフラン式養殖試験を行ったが、この地の産物となるまでにはならなかった。たゞ海苔だけが、次第にその収穫も増して、今日の地位を占めるに至つたほか、特別の発展はなかつた。たゞ従来の運営を組合組織に改め、洲崎・野島・柴・富岡・三分とそれぞれが、一九〇三年（明治三六年）中に漁業組合として発足したことは、漁業界の進歩であつた。

農業関係は一九〇〇年（明治三〇年）頃、町屋の柴田氏によつて、静岡県浜名湖附近より蓮が持ち帰えられ、これを泥亀新田に植えて蓮田としたところ、その結果が成功して、明治四二年には七千五百貫、明治四五年には一万五千六百貫と、急激に収穫量を増すことができた。

又同じ頃洲崎の山口氏によつて、トマト・パセリ・アスパラカス等の西洋蔬菜が、当時としては珍らしく栽培された。玉葱は金沢村だけでも明治四二年に六千貫、明治四五年に三万貫と、時代の要求に答えて、収穫の増加をみるにいたつた。然しこの反面、古くより年貢として、最も重要であつた米の収穫量は、年々減少していった。又金沢の産業の中で、遠く鎌倉時代から発達した製塩業は、この時代の末期に廃止となつた。それは、一九〇五年（明治三八年）製塩地整理の法律が公布されたことによるが、時代の進歩・発展が、原始的な製塩方法を必要としなくなったためであらう。江戸時代の初期には、ほとんど各村で行われて、三千俵近くとれた製塩業も、明治四三年をもって終りをつげたのである。

七、ランプから電灯へ

金沢区が、今のように発展したのは、こゝ二三十年間である。明治から大正にかけては、農漁村としての、物資の生産地であり、その物資の販路は交通の関係上、海上運輸の便のよい、横須賀方面であつた。

大正のはじめ頃は、金沢区の交通機関といつても、人力車程度のもので、横浜（今の伊勢佐木町方面）に行くにしても、徒歩で行くか、人力車で行くか、自転車をかうか、特別に乗物らしいものはなかつた。もっとも金沢に電灯がひけたのが大正のはじめ頃であつたので、想像もつくと思

われる。道路も今のように補装されたものでなく、大きな石がゴロゴロとした、三米位のものであった。今でも谷津坂の日平産業の下に、一部その面影をとどめている。人々は谷津・富岡の急坂を越して横浜に行った。今の富岡の切通しはトンネルだったので、このトンネルと今のトンネルの間は、人家もなく、さびしいところで、よく追剝が出たそうである。杉田までゆくとこゝから一頭立の馬車がでる。市電が八幡橋までひけていたので、そこまでこの馬車を利用した。杉田から磯子あたりまでは、両側に桜の並木道がつゞき、海岸にそった、まことに景色のよいところであった。

八幡橋には馬車小屋があり、人力車も列をなしていた。

自動車もめつたに通ることもなく、時たま外人のをせた車がモウモウと白い煙を立て、通りすぎたくらいである。子供は物めづらしく家をとび出してながめた。

今の金沢小学校附近から海岸よりのほうは、いくらかの畑がつゞき、他はほとんど田圃であり、洲崎町から平潟町一帯は塩田のあとで、ところどころに、塩をためたと思われる、腐れかゝった木の樽が、なかば土に埋れて、その面影をとどめていた。

この塩田のところどころに、浅い池があり、附近の子供たちは、あらましこの池で泳いだ。

これらの塩田や、池の間をぬうようにして、田畑が細長くつゞいていた。

あたりは見渡す限りの広野原で、乙舳の沖を通る帆かけ舟をながめることができた。

人家も海岸よりに二・三軒の別荘が、三保の松原のように長くつゞいた松並木の間に、ちらほら見えるていどであった。

六浦の方はいえ、今の八景駅の前の間道を通つて切通しをぬけて、六浦に入る道であった。この切通しにきつねがでるといふ噂もあり。中三米位で、両側が絶壁になり、上の方からつたが垂れ下って、昼でも暗いところであって、日暮ともなれば、全く人通りはなかった。

六浦にぬけると、川・三艘・高谷・内川・瀬ヶ崎を通して、室の木に行く。この附近は、今でも道路よりに、かやぶき屋根の家が多く、道路も昔の面影を残しているところが多い。

室の木と野島の間に、渡し舟があつて、通行人の便をはかった。

陸路は、金沢内でもこのとおりであるから、横浜も横須賀も、もちろん逗子・鎌倉も交通不便で、道は曲りくねり、急坂やトンネルが多くて、とうてい車を使用することはできなかった。

一方横須賀方面の舟運は発達して、金沢の主な産物の販路になっていた。この航路は、途中波浪の荒い東京湾に、出ることもなく、内海や堀割

を通過して吉倉（横須賀）に行くことができた。

この物資を輸送するのに、あきない舟がたくさん活動した。

小さい舟であったが、途中の危険も少なく、荷車（大八車）の四・五台分を楽々と、のせることができた。これにつみ荷される物資は、金沢の農海産物で、商人は組合をつくり、五・六人でこの舟を所有していた。この商運を祝うために、毎年一月二日にみかんなげの行事を行った。

場所は洲崎の東屋（今とりこわされた）の前の道路で、前方には今のよう埋立地はなく、海に直接に面し、風景のよい所であった。伊藤公が憲法起草の宿舎の一つとして、東屋を選んだのも、当時如何に景勝の地であったか知ることができる。

数十隻の船が、この東屋の前に勢揃いをなし、思い思いの旗をおし立て、はっぴ、ももひき姿の威勢のよい若い衆のいでたちは、正に一大絵巻物のようであった。

やがて、一せいに平湾潟の中程にこぎだし、舷々相含んで、岸にせまってみかんをなげた。

黒山のように集った人々は、大きな網をもってこのみかんをすくった。子供たちは着物のふところをふくらませて家に帰った。

金沢に食品市場ができたのは、大正四年頃であったので、それまでは商人が谷津・釜利谷・朝比奈方面に青物を、海産物は柴・野島・室の木方に、買出しにいて品物をあつめた。

金沢に市場ができたことは、金沢の商業にとって大きな変化であり、これによっても、一歩近代社会に進んだことといえよう。

この間における人口動態は、一九二五年（大正一四年）の国勢調査の結果が金沢村五、四一〇人、六浦荘村四、三二六人で総計が九、七三六人であるから、明治三〇年より二八年間に、一、四〇〇人位しか増えていない。

たゞ大正一二年九月一日の関東大震災によって、地盤の弱い洲崎は大被害をうけ、全戸数一七三戸がほとんどたおれ、国道すじは、きれつができて地盤が約一米もさがった。

又大正一〇年に相武自動車株式会社が、横浜の八幡橋から金沢經由逗子間に乗合バスをはじめた。これが金沢にバスができたのはじめである。さしよは料金も高く、一般の者はめったに乗ることもできなかったが、乗客が増えるにつれて、料金もだんだんさがり、湘南電鉄がひけるまで重要な交通機関となった。

八、躍進の金沢

金沢区が近代都市として、一大発展をしたのは昭和になつてからの二〇年間である。

その原因とも考えられるめえが、昭和のはじめ頃からぼつぼつ現れはじめた。

明治四三年以来使用しなくなった塩田を、何とかしなければならぬということは、だれでも思ったことであろう。二〇年間も、そのまま放置されたのだから当然のことである。

そこで金沢町（金沢村は大正一五年一月一日金沢町となつた）耕地整理組合が有志によつて組織されて、この塩田の埋立工事をする事になつた。これは平潟湾の土砂をサンドポンプをもつて埋めるのである。夜も昼もこの機械の音がやかましく、附近の人々は眠られなくて大へんこまつた。今の蓮田の埋立が、容易に実現しないことを考えても、この工事がそうかんたんにでき上つたとは思えない。色々の困難をのりこえて、昭和二年九月に一九町歩の埋立工事が完了した。

こえて、三年後、昭和五年四月一日に、黄金町・浦賀間と金沢八景・逗子間に、湘南電気鉄道が開通した。当分の間は乗客もすくなく、きれいな車に、朝夕の通勤時でも、わずかばかりのお客で、乗っている者は空車同様の運転を、きのどくに思つたくらいである。時には運転手・車掌に乗客一人のこともあつた。

当時金沢区内に設けられた駅は、金沢八景・金沢文庫・湘南富岡の三駅であつた。

翌年一二月二六日に京浜電鉄市内乗入線（横浜駅〜日ノ出町間）が完成して、湘南電鉄との連絡ができたので、東京方面や東海道線等の連絡は大へん便利になつた。

湘南電車の利用者はなせなかつたのか、当時の金沢は農漁村で京浜工業地帯への通勤者もほとんどなく、近代的観光遊覧の地でもなければ、住宅地でもなかつたからである。

近代都市の発展はまづ交通からということはこの金沢の発展が、はつきり証明している。湘南電鉄は、開通した翌年の昭和六年七月一日に、乙舩海水浴場をひらいて、京浜地区の海水浴利用者の便をはかつた。

同年九月一八日に満州事変が起つて、アジアの一角から東洋の平和は安定をかくようになり、金沢も時代の要求をはん影して戦争に必要な製品をつくる工場が、ぼつぼつできはじめた。そして日本飛行機株式会社・横浜海軍航空隊・日本製鋼所・大日本兵器株式会社・海軍航空技術廠支廠等々……相次いで設立されて、金沢はさながら兵器廠のような地域となつた。この間に支那事変（昭和一二年七月七日）が起り、やがて日本の国運と総力をかけた大東亜戦争（昭和一六年一二月八日）に突入していった。

全国よりちようさされた工具は、せまい金沢に満ちあふれて、いたる所に宿舎が立てられた。この人員・物資の輸送の動脈になったのが、湘南電鉄で、文字通りの殺人的混雑はたとえようもなかった。

このような移り変りを、人口動態から考えてみよう。一九二五年（大正一四年）に金沢五、四一〇人・六浦四、三二六人・計九、七三六人が、一九三〇年（昭和五年）に金沢六、〇二六人・六浦四、六〇七人・計一〇、六三三人となって、ようやく一万人をこしたが、明治三〇年より二八一年間で二、三一九人の増をみただけで、昭和一〇年には、金沢八、二六八人・六浦五、七四〇人・計一四、〇〇八人となって、五年間に、二、三七三人の増加をみ、ようやく本籍人口より三、〇〇〇以上の差がついてきた。このことは、他よりこの地に住む者が多くなったためと思われる。

又昭和一六年には人口三九、七二七人で、本籍人口との差、二三、三二五人で日本がガダルカナル島に敗退・学徒・戦時動員体勢確立・徴兵令の一年くり下げ等・すべてを戦争へ強行集中したこの年には、人口六〇、五九七人を数え、本籍人口との差、実に四一、九七〇人となった。

この間における行政区画の変遷は、さきにとおり、一九二六年（大正一五年）金沢村が町になり、横浜市の第四次拡張によって、屏風ヶ浦村・大岡川村及び日下村が市に編入された一九二七年（昭和二年）四月、久良岐郡は金沢町と六浦荘村の一町一村だけとなった。そして一九三六年（昭和十一年）一〇月、横浜市の磯子区に編入されたため、久良岐郡の名は自然消滅し、この地は磯子区金沢出張所の管内になった。その後一九三九年（昭和十四年）町界・字界の変更・町名字名の改称をして地番の変更がおこなわれ、太平洋戦争の動乱を経て、一九四八年（昭和二十三年）五月一五日、磯子区よりごく自然的に、現在の金沢区が独立したのである。

又横浜市の磯子区編入の少し前に、金沢町と六浦荘村の横浜市水道給水区域編入が認可されて、編入後間もなく給水がはじめられた。当時の給水戸数は約八〇〇戸であった。

戦争によって大変化を起した金沢の地は、古くから観光の地として、又ある時は文教の地として、広く親しまれ、明治の時代には、名士の別邸が多く建ち、それがこの時代までつづいた。

地元民の大部分は、農業を主とし、ついで漁業を営んできたが、こゝに工業地として急変し、人口は激増し、外部より通勤する多くの工具とともに、地元民も旧来の職をはなれて、工場に通う者も多くなった。

したがって、工場や住宅のために、田畑や山林は変り、従来の田畑の耕地面積は約五割近くもへった。

又一八九九年（明治三二年）要塞地帯法公布により、次第に取締りが強化されたため、観光金沢の地も、幾多の出入禁止区域のため、名のみとなった。

このように、すべてを戦争体勢として進んで来たが、一九四五年（昭和二〇年）八月一五日をもって、一八〇度の転換を余儀なくしてしまった。思えば、遠く鎌倉時代より、その時代によって栄枯盛衰はあったが、文教の地としてその名を恥かしめなかった金沢文庫は、一九二八年（昭和三年）に神奈川県立御大典記念事業の一つとして、大橋氏の寄附金五万円を合せて、一〇万円で文庫と昭和塾を建てることに決定し、昭和五年に、この文庫は県立図書館として開館された。そして、一般に公開し、今日なお多くの重要な古書を蔵し、その面目をほどこしている。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字が続き、内容は不明瞭である）

Ⅱ 土地のすがた

一、金沢への誘い

武州金沢といえは、江の島、鎌倉とならび、都市人にとつて、郷愁にも似たあこがれの土地である。これは、この金沢が、古い歴史と、美しい風光にめぐまれ、今もなお、絵の町、詩のふる里の姿をもちつづけているからであらうか。

金沢は、行政的には、横浜市の金沢区をいい、横浜市の南端に位する。もとの武蔵国はここままで、南西は相州に属する横須賀・逗子・鎌倉などの観光都市に接し、三浦半島の入り口となつてゐる。

北は、杉田近くの円海山を主軸として、武相の境を二わけにする丘陵山脈が南に走り、朝比奈峠、鷹取山をつなぐ。これらの山々は、南東にひらけて、東京湾にのぞむこの金沢の町を、やさしく抱きこんでいる形だ。従つて、気候は温暖、冬は東京より一、二度高いといわれる。

こうした地勢の中に、北からいうと、富岡・金沢・釜利谷・六浦の順に、鎌倉時代から発達した聚落が中心となつて、新しい金沢の町づくりが行われてきた。そして、これらをつないで、横浜から横須賀に通ずる国道と、品川から浦賀に至る京浜急行電鉄の軌道線（区内には、富岡・谷津坂・金沢文庫・金沢八景・六浦の五駅）が、力強い交通の動脈となつてゐる。

まず北限は、杉田に接続した県立工業試験所のある昭和町で、青砥をえて、横須賀への道を南下すると、富岡がある。ここも古い町で、山ふところに、海をのぞむ閑静な住宅地だ。

谷津坂を越え、金沢文庫駅に出ると、ここからは金沢文庫、称名寺も近い。寺前・平瀧・洲崎・乙艦などは、旧久良岐郡金沢町の中心部で、街並も整い、人家が多くて、視界もひらけてくる。ここは、東に乙艦海岸をひかえ、西は泥亀新田をこえて、釜利谷に対する。釜利谷は、金沢の裏街道にあたり、明治のころまでは、人口の多い農業地帯であったが、今は住宅地として急に発展してきた。

六浦は、金沢八景駅を中心として展開する。ここは、昔から金沢八景のポイントで、平瀧湾をかこみ、瀬戸神社をはじめ、琵琶島弁天・瀬戸橋・九覧亭などがあり、古い金沢の姿をもつともよく今日に残している。国道は更に南にのび、関東学院のある内川を区の南限として、追浜に出で、横須賀市となる。

一方六浦橋で国道にわかれ、ガードをくぐると、もとの六浦莊村に入る。この道は更に二つになり、一つは逗子へ通じる。いまひとつは、大道をとおつて、朝比奈の峠越へに鎌倉へと、武相トンネルをぬけて大船に出ることができる。これらの道は、いずれも戦後に新しく整備されたものだが、立派な道で、鎌倉と大船へそれぞれのバスもあり、金沢の新しい観光ルートとして注目される。

また京浜急行は、八景駅で分岐し、六浦、神武寺を経て、逗子まで行っているが、将来は、葉山から三崎へ延びて、半島の巡環線となる予定である。なお、横浜から金沢へは京浜急行品川——浦賀の直行でもよく、国鉄は横浜駅で乗りかえる、またバスは、横浜駅から六浦行と、堀ノ内行（横須賀）の二系統があり、そのうえ、区内にいくつも支線があつて、交通は至つて便利だ。

二、古 い 金 沢

金沢区は、もとの久良岐郡の一部であつた。金沢町と六浦莊村との二つだけが、最後まで残つたわけである。もともとは、古く武州六浦莊といわれ、金沢はその中に含まれた郷村の名である。従つて、六浦の名は、古く藤原時代に見え、和名抄には鮪浦とある。久良岐は、久良・倉城海月など、六浦を六連とも書き、金沢の名を、むかしはカネサワと澄んで読んでいたことが、金沢文庫の古文書にみえている。

鎌倉時代に入ると、吾妻鑑の元仁元年には六浦と書かれており、当時から風光の美がうたわれ、観光の地としても知られていた。例えば、安貞二年の四月に、將軍頼経が六浦に来遊し、二泊してその美を賞したし、また寛喜五年の三月には、將軍が三崎へ花見に遊行したさい、六浦の津から船を出されたこともある。また金沢は、政治都市としての鎌倉の背後を擁する地であり、その上、房総へは海路に通ずる交通上の必要もあつて今の朝比奈峠は、当時から重要な道路となつていた。鎌倉の中期になると、この地は北条実泰の領地となつた。従つて、金沢文庫を作つたその子の実時以下代々金沢氏が領主となり、称名寺の門前聚落が発達して、ここにはじめて、金沢発展の基礎がつくられた。

今の釜利谷は、古く富田郷といい、富岡は、中ごろ豊島氏の領地であつたこともある。六浦は、大体瀬戸神社の勢力範囲であるが、社家分、寺分、平分をあわせて三分村といつた。徳川時代には、徳川の直領であつたり、米倉藩になつたりしたこともある。

江戸時代になると、江の島、鎌倉の巡覧コースとなり、物見遊山の人は、海の手鎌倉道としてこの道を選んだ。保土ヶ谷から、永田、弘明寺に出て、笹下、栗木をとり、峯の円海山から、山越えに能見堂へ、そして金沢へくだる。ここで金沢八景を一巡し、朝比奈峠の鎌倉道をたどつて十二所から、鶴岡八幡宮へゆくわけである。

三、金沢文庫と称名寺

金沢文庫は、北条実時によってつくられた。場所は、区内金沢町の山の手、金沢文庫駅より小柴ゆきバスの途中、称名寺の赤門を入った境内にある。

実時は、六浦の庄主北条実泰の子で、執権義時の孫にあたる。父の後をついで、十一才のとき小侍所別当となったが、この頃から学問が好きでいろいろ和漢の書物を写したり、集めたりしていた。二十九才のとき引付衆となったが、同じ役に、京都から来た学問家の清原教隆がいたので、彼と深く交際して、いろいろ書物の伝授をうけ、一そう学問の道にはげんだ。

実時は、晩年になって職を退き、この金沢に住むこととなった。ここは六浦庄といって、風景もよく、鎌倉に近い要地で、父実泰のときから領地であったので、ここに別宅をつくっていたのである。この位置は、現在の新文庫の建っているところだが、これと同じところに、称名寺という真言律宗の寺を作り、審海を開山にむかえた。

それから、鎌倉の自宅の書物をこちらに移し、別宅から、トンネルを通して、小さな丘を越えた向うの谷に文庫をつくった。ここを文庫ヶ谷ぶんこがやという。この跡には、神奈川県立社会教育会館があり、文庫の古址碑がたっている。実時は、建治二年十月、ここで亡くなった。年五十三である。金沢文庫は、実時ばかりでなく、その子の顕時(二代)、孫の貞顕(三代)、貞顕の子貞将(四代)にわたって、引きつづきよく経営され、鎌倉文教興隆のため大いに貢献した。なかでも、三代の貞顕はもともと秀れた人で、六波羅の重職につき、鎌倉にかえってからは、執権連署にまでなった。この人は、いろいろの書物を集めて、実時の文庫を一層よく充実させた。従って、その書物は、広く世間に利用され、徒然草つれづれ草を書いて有名な兼好法師なども、再度ここを訪れている。

北条滅亡後の文庫は、称名寺の管理に移り、そこで書物を預っていたが、寺も北条氏のような後援者を失ったので、段々に衰え、書物も自然に散逸してゆくばかりであった。明治三十年になって、伊藤博文が、金沢の夏島で、明治憲法を起草したときの参考書を寄附し、大宝院のあとに、ささやかな閲覧所をつくったこともある。

現在の文庫は、鎌倉風の二階建鉄筋コンクリート造りで、昭和五年神奈川県の手により、御大典記念事業の一つとして作られ、その年の八月五日に開館した。階上は博物館で、金沢文庫や称名寺伝来の古美術品、典籍文書の数々を陳列しており、階下は、事務室と閲覧室につづいて書庫があり、古書二万冊、古文書五千通、その他多数の学術参考書がここに収められ、学界の宝庫となっている。

称名寺は、金沢文庫をつくった北条実時が、自分の別宅地に建てた寺である。この寺は、奈良西大寺の末寺で、真言律宗。本尊は弥勒菩薩。実時は、文永四年に、妙性房審海を、野州の薬師寺から迎えて開山とした。二代は明忍房劔阿で、三代は本如房湛養、ともに当代の学匠である。四代は観蓮房実真、五代は玄寥房什尊というが、六代以下の世代はまだ明らかでない。

称名寺は、元亨三年の古図に見るような七堂伽藍を備え、房総その他の地方に多くの寺領を有し鎌倉における中級寺院として栄えていたが、室町以降北条氏の保護を失ったので、次第に衰えていった。

大宝院、一の室^{むろ}、海岸寺などは最近まであったが、いま光明院の門だけが古い建物になっている。称名寺の建物は、本堂と釈迦堂、光明院、鐘楼、仁王門、赤門、新宮の七つが、現存する堂塔だ。

称名寺の金堂は、天和元年に再建したもの。称名寺の建物は概ね江戸期のものだが、この金堂の一部には、鎌倉時代の材料を使用している。例えば、本尊の背と左右、裏側には、関東稀にみる弥勒来迎及浄土図の壁画があり、さき頃重要文化財に指定された。

赤門は、称名寺の総門（南大門）で、明和の再建であるし、仁王門は、鎌倉時代からあったが、いまは文政元年九月に再建された。仁王尊は、この辺に珍しい大きな姿で、室町期のものと思われる。

称名寺の苑池は、阿字ヶ池、または心字池といい、中国の西湖をかたどったといわれる。鎌倉の末期に、三代貞顕がこれを修造した。当時の立石が今も残っていて、古い林泉の美しさを保っている。昭和三十二年に、本堂と並んで、立派な庫裡客殿が新築された。ここの庭には、鎌倉時代の青島石が集められ、ツツジの植えこみが美しい。

背後は、稲荷山につづいて金沢山があり、眺望がすばらしい。その山すそには、北条実時一門と、称名寺世代の廟所がある。

四、金 沢 八 景

金沢八景が有名になったのは、徳川時代のことである。これは主として、能見堂から見た八ツの名所をいったもので、能見堂には、その景色を賞嘆した、巨勢の金岡筆捨の松という老木があった。もっとも、慶長十九年にできた、名所和歌物語に、金沢八景のことが現われているから、もはやそのころには、名が知られていたものとみえる。

八景の場所も、時代によって変遷がある。能見堂からみた八景は、大川新田の埋立によってその価値を失い、そののちは、九覧亭にその王座を

譲ったが、今では、金沢山からの大観が一番よく八景を眺められるところとされている。いまの八景は、心越禪師（中国の人、水戸祇園寺開山）の詠んだ、武州能見堂八景詩ができて、大体现状におちついたようである。次に八景の個々についてのべる。

洲崎の晴嵐（すさきのせいらん）

もと山市の晴嵐といい、峠附近の景色をさしていた。江戸中ごろまでは、洲崎にも松並木があり、いまでも、照手姫のいぶし松をはじめ、区内に多小の名残りをとどめている。

瀬戸の秋月（せとのしゅうげつ）

瀬戸橋附近の秋月をいったものである。墨絵のような瀬戸明神の杜から、満々たる平瀧の水をへだて、弁天島、遠く野島山あたりを眺めた夜景を思えばよい。

小泉の夜雨（こずみのやう）

金沢文庫駅の南を流れる大川上流の南岸から、手子明神の附近をいう。むかしは内海がこの辺まできており、芦荻が茂っていた。手子明神の裏に竹生島があり、弁財天を祀る。小泉夜雨の松というのがあった。

乙艦の帰帆（おっとものきはん）

乙艦海岸の帰帆風景をいう。金沢一帯が船の艦の形をした海岸線つづきであるから、おともというようになった。いまは金沢海水浴場として、年々盛大な浴客を迎えている。

称名の晩鐘（しょうみやうのばんしょう）

称名寺のこんもりした森の中からきこえてくる晩鐘をいう。この鐘は、正安三年に、北条顕時が改鑄したもので、重要文化財に指定されている。

平瀧の落雁（ひらかたのらくがん）

平瀧は、いまの瀬戸橋から、内川、野島へかけての内海をいう。明治初年まで、この周辺で塩を焼いていた。現在でも海苔そだが立ち、水鳥が飛んでいたりして、落雁にふさわしい風景だ。

野島の夕照（のじまのせきしょう）

野島は、もと独立していた島で、ここに漁民の村落があった。海をへだてて房総を望む景勝の地であるが、この漁村の夕照をいったものである。

内川の暮雪（うちかわのぼせつ）

はじめ釜利谷の方面をさしていたが、いまは関東学院のある内川橋、瀬ヶ崎方面の景色で、遠く鷹取山から、神武寺へつづく連山をとりいれた暮雪をいう。

五、四石・七井・八名木

四 石

美女石と姥石 称名寺の池中にたっている。今は欠けて一つしかない。むかし少女が池中におちたのを、姥が助命のため入水し、二人とも溺れて石と化したという。古歌に、「称名のみりの池は美女石も姥もともに蓮のうてなに」というのが残っている。

福石 また服石ともいう。瀬戸の旅亭千代本と、弁天出島の中間、道路沿いの海中にあり、たくさん小石がのっている。福得の石といわれ、また一説に、頼朝が、三島明神に祈願したとき、この石の上に衣服をぬいで、水垢離をとったといわれる。

飛石 金竜院の本堂横にあり。高さ一丈、巾九尺ある。むかし三島明神がこの上に飛来されたということである。その形容から、一名薦石ともいう。もとは寺後の山にあったが、文化九年の地震で、現在の位置に転落した。

七 井

金沢は、鎌倉と同じように、海辺で水に不便であるから、古くから井戸が大切にされ、名水はいまなお旧蹟として知られている。

御井戸 称名寺の赤門から、八幡宮へ出る道の左側にある。もと大神宮を祀ってあったので、その神井であろう。いまも里民が常用する。

亀井 称名寺門内西側の民家の裏にある石の丸井戸で、清水が豊かである。称名寺の池から、大川へそそぐ流れを亀井川（のちに走川となる）といい、御所ヶ谷に出ると亀井橋がある。

染の井 谷津の火の見る北半町ほど行ったところ、線路をこえて左に入った山の奥にある。水は浅いが美水で、如何なる干天にも涸れないといわれている。この附近に滝不動があり、谷津の水源地となっている。

白井 釜利谷道、白井橋の右側の崖下にある。白濁した鉱泉水で、この附近一休がそうらしく、附近には、金沢温泉という鉱泉宿がある。

赤井 釜利谷道、正法院の庫裡の前にある。鉄分をふくんでいるので、赤く見えるといわれる。鉱水は、神経痛、リュウマチなどによくきき、

赤井谷温泉として、古来その名がある。

小中井 釜利谷の赤井の先、二町ほど西に入った畠の中にある。ここにむかし寺院があったといわれる。

荒井 荒井妙法の井戸で、六浦引越金竜院の少し手前、左側にある石の角井がこれである。井戸の底近くに、横書きで「荒井妙法」の四字が刻んである。妙法は、杉田の妙法寺や、六浦の上行寺を創めた人である。

八名木

金沢の八名木は、慶長十九年にできた、名所和歌物語にみえているから、古くよりその名が知られていたわけである。この八名木は、次のようなものであるが、いま残っているものもあり、名ばかりで、残っていないものもある。

青葉の楓 称名寺の境内、本堂の前にある。すでに文明十七年の、堯恵の北国紀行にみえているから、古い存在である。冷泉為相が、「いかにしてこのひとものしくれけん山に先立つ庭のみみじ葉」という歌を詠じてから、冬になっても紅葉しない楓である。謡曲「六浦」は、これに因んでつくられた。いまの楓は後世のものであろう。

西湖の梅 いま称名寺の境内にあるのは若木である。「万里和尚の梅花無尽蔵」に、北条氏が商船につんで、中国の杭州西湖から移したと書いている。一花に十数粒の実なるので、俗にこれを八房の梅ともいう。

黒梅と桜梅 名所和歌物語に「この両木称名寺にあり。ただし今絶えてなし。」とあるから、古く滅んだものである。従って、どんな品種であったか判らない。

文殊桜 これもむかし称名寺にあったというが、現存はしていない。

普賢象の桜 現在金沢文庫の上り口にあるのは、後世に移植した若木である。見ごとな大輪の八重桜で、花卉の心から一二片の緑葉を生じ、四月の終りころ、文字通り七重八重と咲きほこる。

蛇混柏 じやひやくしん もと瀬戸神社の境内にあったが、延宝八年の大風で枯損した。その材の一部を神社で使っている。枯骨のような容姿から形容した名だと思ふが、これも「梅花無尽蔵」にみえている。

一つ松 室の木の追浜近くにあった。この辺をむかし雀ヶ浦といい、風光のよい海であった。別に一葉松ともいっている。最後にこれは古くからの八名木には入らぬが、金沢文庫の西側に、新名木楷樹がある。これは、トネリバハゼの木（ウルシ科）のことで、もと

中国の孔子の墓に植っていたもの。内地では稀らしい樹種である。牧野富太郎博士によって、孔子木という名がつけられた。

六、神社 仏閣

金沢の神社仏閣は、おおむね鎌倉開府以後にたてられたもので、それから中世以後になって、段々に創建されてきた。例えば、源頼朝がたてたという瀬戸神社や、富岡八幡宮、範頼ゆかりの太寧寺、葉王寺など。日蓮上人に關係あるものでは、安立寺と上行寺がある。また称名寺と竜華寺は、奈良仏教の東漸に伴う、鎌倉極楽寺忍性の影響下にある戒律宗の一派であり、金竜院や泥牛庵などは、鎌倉禪のそれである。

瀬戸神社 六浦の瀬戸にある。渡海の神として、源頼朝が三島明神を勧請したといわれ、祭神は大山祇命である。古く応安七年の鐘があったというが、いまは残っていない。この辺きつての神社で、夏の大祭は農民の祭りとして賑う。室町時代には、沢山の参詣者があったという。

琵琶島弁天社 瀬戸神社の附属で、同社の前浜が平瀉湾に突出した出島にあり、松並木があつて、風致区をなしている。頼朝の御台所政子が、江州の竹生島弁財天を勧請したといわれている。

手子神社 釜利谷の小泉にある。大山祇命、木花咲耶姫を祀る。文明五年に、伊丹氏が瀬戸明神を勧請して作ったといわれる。むかしはこの辺まで海が広がっていた。

浅間神社 谷津の金沢文庫駅裏にある。木花咲耶姫が祭神、社内に心越禪師の額がある。

寺前八幡神社 寺前の国道から、称名寺へ入る枯銀杏の所にある。むかし称名寺鎮守の八幡宮であつたという。お祭りのときは、いまでもこの御輿が称名寺に渡御される。

熊野権現社 柴町南寄の山腹にある。境内は眺望がよく、祭典には、御輿が海中に入るのも珍らしい。

富岡八幡宮 富岡の宮田海岸にある。建久年間に、源頼朝が勧請したと伝えられている。鎌倉期から繁盛した古い神社で、俗に浪除八幡ともいう。祭典も古式の風を伝えている。深川の富岡八幡は、ここから分祀したものだといふが、確証はない。

長昌寺 (富岡山) 富岡の東にある。鎌倉建長寺末で、柳下豊後守が開基、開山仙溪は、慶長十六年に没した。

慶珊寺 (花翁山) 富岡の海岸にある。古義真言宗竜華寺末で、寛永元年豊島信満が父母の菩提を弔うために作った。本尊は不動明王、開山を伝榮という。鎌倉版の大般若経六百卷、十一面観音などの文化財がある。

宝珠院（知福山）富岡の中ほどにあり。真言宗、豊島信満が開基で、開山隆成は、寛永四年に没した。

持明院（海照山）富岡谷にあり。真言宗、もとは長浜にあったという。天文十四年開山源隆という墓碑がある。

悟心寺（楞嚴山）富岡の西にある。建長寺派の禅寺で、開山竜洲は、明暦三年に没した。

太寧寺（海蔵山）建長寺派の禅寺、もと六浦の瀬ヶ崎にあったが、いまは谷津にある。鎌倉時代に、千光国師栄西が、源範頼の菩提を弔うために建立したという。本尊は、俗に臍薬師といわれる。本堂の裏に、範頼の墓と、江戸の医師小川笙船の墓があった。

正法院（赤井山）釜利谷の赤井にある。真言宗、弘法大師の開基という。大師が赤井の鉱泉の水で描いたという不動画像が秘仏となっている。

金蔵院（北嶺山）多聞寺ともいう。真言宗、釜利谷の北谷にある。開山弘吽は永正四年に没した。

満蔵院（護法山）釜利谷和田にある。真言宗、般若寺ともいう。開山は尊慶、もと手子神社の別当寺であった。

禪林寺（竹巖山）釜利谷の坂本にある。曹洞宗東昌寺末、開山を能山禅芸といい、伊丹三河守の菩提所であった。

自性院（福松山）釜利谷の西にある。真言宗、開山は栄俊（宝永三年没）といい、寺伝によれば、伊丹三河守が息子の菩提を弔うために建てたという。

東光寺（白山）釜利谷白山道の入口にあるが、むかしは白山寺といい、金沢文庫の古文書にもみえている。もとの位置は、更に奥にあったが、のち現在のところに移った。室町時代に、鎌倉薬師ヶ谷の廃寺医王山東光寺をついで、建長寺末の禅寺に改めた。畠山重忠の開基といわれ、それに因んだ寺宝がある。

長生寺（寿楽山）六浦にある。浄土真宗、もとは寿楽寺という真言の寺で、釜利谷の小泉谷にあった。天文元年より現在の宗旨となる。開基は頼乗という。

千光寺（日光山）六浦侍従川の北にあり。浄土宗、本尊千手観音は、照手姫の守本尊で、姫が侍従川に投身したとき、その身代りとなったという。天文元年忍誉を中興開山とする。

光伝寺（常見山）千光寺の西、侍従川の北にある。浄土宗光明寺末、寺伝によると、長野六右衛門が、房州白浜で、阿弥陀如来の首を拾い、前業を悔いて、鎌倉から銅をとりよせ補鑄して、本尊としたといわれている。

上行寺（六浦山）六浦の入口にある。法華宗の中山寺末である。日蓮と荒井妙法に関する伝説がある。また兼好法師の旧跡という。

宝樹院（高栄山）六浦の大道にある。円覚寺派の禅寺、もとは真言宗で、高照寺といい、三艘にあった。中興の祖永吽は万治元年没。

泥牛庵（吼月山）瀬戸の引越にある。鎌倉円覚寺末、開山土雲は建武二年に寂。能仁寺の塔頭という。

金竜院（昇天山）六浦引越の出崎にある。建長寺末、開山は方崖元圭（永徳三年没）、本尊は正観音で、裏山に九覧亭があり、山腹には「昇天山九覧亭之記」という碑がある。

染王寺（野島山）善応寺ともいう。真言宗、もと野島山の頂上にあつたが、いまは山下に移っている。永禄九年に示寂した、南都の源朝上人を開基としている。近くに土地の豪家永島泥亀の家趾がある。

竜華寺（知足山）竜源寺ともいう。洲崎の国道の東にある。本尊は弥勒菩薩、はじめは淨願寺と号し、六浦の山中にあり、称名寺と同じく戒律の道場であつたという。のち太田道権が修復を加えたことがある。

安立寺（福船山）日蓮宗、妙本寺末、町屋の国道の東にある。安立坊が、日蓮上人と富木五郎胤継の船中間答をきいて改宗したという。船中間答の旧蹟として知られている。

天然寺（法爾山）浄土宗、町屋の西側にある。天文元年、鎌倉光明寺の十九世、然齋禪芳が開基となつた。毎年お十夜が盛大におこなわれる。

傳心寺（嗣法山）曹洞宗、町屋の東にある。開山は養拙宗牧、大永年中北条氏直の開基するところという。

薬王寺（三療山）寺前称名寺の赤門前にある。むかしは瀬ヶ崎にあつた。建久二年源範頼のたてた寺で、古義真言宗である。寺伝によると、瀬ヶ崎太寧寺の前身ともいわれ、毎年三河忌をおこない、範頼を祭っている。

七、名 所 旧 蹟

能見堂（のうけんどう）金沢文庫駅の北裏山にある。寛永のころ、久世氏が増上寺の子院を移して、擲筆山地蔵院を興した。もと横浜から金沢へ越す旧道で、

八景一望の名所であつた。巨勢金岡筆捨の松があつたが、今はない。

九覧亭（きゅうらんてい）聖徳太子にゆかりのある引越金竜院裏の小山にあり。八景の外富士をあわせ眺められるので、九覧の名がつけられた。むかしは能見堂と共に、八景一見の場所として有名だつた。いまの亭は昭和三十二年、区の観光協会が、工費五十三万円をかけて作った。鉄筋コンクリート平家

建て、朱色が美しい。

四望亭 室の木にあり。能見堂・九覽亭と共に、むかしは八景一覽の場所として有名だったが、今はない。

泥亀新田 でいきんてん はじめは内川の西北の崖にそったところをいった。寛文のころ永島泥亀がこれを開発し、代々の人がこの事業を拡張した。いま泥亀

新田といっているのは、区役所裏一帯の広大な田圃を指している。

兼好法師旧居 六浦の上行寺にその伝説があるが詳らかでない。兼好が金沢に来たことは彼の歌集にもみえ、徒然草にも、金沢の海のへなたり(貝)のことをいっているし、金沢文庫には、兼好の書状が残っている。

放下僧仇討の旧蹟 むかし瀬戸神社の境内に三本杉があり、この附近で、放下僧の仇討があったという。正大夫節や、謡曲「放下僧」にこのことが取材されている。

青ヶ台貝塚 釜利谷の東西を分けて相對している台地を青ヶ谷といい、むかし金沢貞将の居城があったというが、これは伝説にすぎない。山上には、石器時代の土器、貝塚などが発見される。

称名寺貝塚 金沢町称名寺赤門附近から、薬王寺、御所ヶ谷一帯にかけては、先住民の聚落で、いままも縄文式土器、骨器、獣骨などが発見され、称名寺貝塚として学界の注目するところとなっている。

野島山 金沢の南端の海辺に立ち、足下に夏島・乙鱸の海を見下して眺望がよい。現在は横浜市の特別風致区として開発されつつある。頂上では貝塚が発見され、先史時代の猫の頭骨が出たこともある。

塩風呂の旧蹟 野島東南方の丘で、いま稲荷社を祀っている。むかし紀州大納言頼宣が、ここで療養のため塩風呂をたてたという伝説がある。

米倉陣屋跡 旧藩主米倉氏の陣屋は、いま金沢八景駅裏の東南方にあった。もと泥牛庵、慶藏院の二寺があったが、これを移して、元禄九年米倉丹後守昌尹がここに陣屋を構えた。

小栗判官と照手姫の傳説地 身代り観音(千光寺)照手姫いぶし松(瀬戸橋の西北)油堤と侍従川(光伝寺の前を流れる川、照手姫投身のところ)小栗判官馬蹄の趾(称名寺客殿苑内)などがある。

東光寺の磨崖仏 釜利谷の旧東光寺趾附近にある磨崖仏で、大分磨滅欠損しているが、高さ数丈あり、関東ではまことに珍らしい石仏である。

塩焼場趾 野島の泥亀、平瀉附近、手子神社、侍従川口などは、むかしの塩焼場であったが、今はもはやその影もない。

白山古道 釜利谷から鎌倉へぬける古道で、ここに白山寺があったから、白山道という。人煙まれな好ハイキングコースとなっている。

泥牛庵（吼月山）瀬戸の引越にある。鎌倉円覚寺末、開山土雲は建武二年に寂。能仁寺の塔頭という。

金竜院（昇天山）六浦引越の出崎にある。建長寺末、開山は方崖元圭（永徳三年没）、本尊は正観音で、裏山に九覽亭があり、山腹には「昇天山九覽亭之記」という碑がある。

染王寺（野島山）善応寺ともいう。真言宗、もと野島山の頂上にあつたが、いまは山下に移っている。永禄九年に示寂した、南都の源朝上人を開基としている。近くに土地の豪家永島泥亀の家趾がある。

竜華寺（知足山）竜源寺ともいう。洲崎の国道の東にある。本尊は弥勒菩薩、はじめは淨願寺と号し、六浦の山中にあり、称名寺と同じく戒律の道場であつたという。のち太田道権が修復を加えたことがある。

安立寺（福船山）日蓮宗、妙本寺末、町屋の国道の東にある。安立坊が、日蓮上人と富木五郎胤継の船中間答をきいて改宗したという。船中間答の旧蹟として知られている。

天然寺（法爾山）浄土宗、町屋の西側にある。天文元年、鎌倉光明寺の十九世、然譽禪芳が開基となつた。毎年お十夜が盛大におこなわれる。

傳心寺（嗣法山）曹洞宗、町屋の東にある。開山は養拙宗牧、大永年中北条氏直の開基するところという。

薬王寺（三療山）寺前称名寺の赤門前にある。むかしは瀬ヶ崎にあつた。建久二年源範頼のたてた寺で、古義真言宗である。寺伝によると、瀬ヶ崎太室寺の前身ともいわれ、毎年三河忌をおこない、範頼を祭っている。

宝蔵院（柴木山）柴町にある。真言宗、西方寺ともいう。中興開山伝宥は、宝永七年に没した。小柴漁民の厚い信仰をうけている。

称名寺（金沢山）金沢町にある。真言律宗、本尊は弥勒菩薩、詳細は第三章をみよ。

七、名 所 旧 蹟

能見堂（のぞけんどう）金沢文庫駅の北裏山にある。寛永のころ、久世氏が増上寺の子院を移して、擲筆山地蔵院を興した。もと横浜から金沢へ越す旧道で、八景一望の名所であつた。巨勢金岡筆捨の松があつたが、今はない。

九覽亭（きゅうらんてい）聖徳太子にゆかりのある引越金竜院裏の小山にあり。八景の外富士をあわせ眺められるので、九覽の名がつけられた。むかしは能見堂と共に、八景一見の場所として有名だつた。いまの亭は昭和三十二年、区の観光協会が、工費五十三万円をかけて作った。鉄筋コンクリート平家

建て、朱色が美しい。

四望亭 室の木にあり。能見堂・九覽亭と共に、むかしは八景一覽の場所として有名だったが、今はない。

泥亀新田 どいきんしんた はじめは内川の西北の崖にそったところをいった。寛文のころ永島泥亀がこれを開発し、代々の人がこの事業を拡張した。いま泥亀

新田といっているのは、区役所裏一帯の広大な田圃を指している。

兼好法師旧居 六浦の上行寺にその伝説があるが詳らかでない。兼好が金沢に來たことは彼の歌集にもみえ、徒然草にも、金沢の海のへなたり
(貝)のことをいっているし、金沢文庫には、兼好の書状が残っている。

放下僧仇討の旧蹟 むかし瀬戸神社の境内に三本杉があり、この附近で、放下僧の仇討があったという。正大夫節や、謡曲「放下僧」にこのことが取材されている。

青ヶ台貝塚 釜利谷の東西を分けて相對している台地を青ヶ谷といい、むかし金沢貞将の居城があったというが、これは伝説にすぎない。山上には、石器時代の土器、貝塚などが発見される。

称名寺貝塚 金沢町称名寺赤門附近から、薬王寺、御所ヶ谷一帯にかけては、先住民族の聚落で、いまでも縄文式土器、骨器、獣骨などが発見され、称名寺貝塚として学界の注目するところとなっている。

野島山 金沢の南端の海辺に立ち、足下に夏島・乙鱸の海を見下して眺望がよい。現在は横浜市の特別風致区として開発されつつある。頂上では貝塚が発見され、先史時代の猫の頭骨が出たこともある。

塩風呂の旧蹟 野島東南方の丘で、いま稲荷社を祀っている。むかし紀州大納言頼宣が、ここで療養のため塩風呂をたてたという伝説がある。

米倉陣屋跡 旧藩主米倉氏の陣屋は、いま金沢八景駅裏の東南方にあった。もと泥牛庵、慶藏院の二寺があったが、これを移して、元禄九年米倉丹後守昌尹がここに陣屋を構えた。

小栗判官と照手姫の傳説地 身代り観音(千光寺)照手姫いぶし松(瀬戸橋の西北)油堤と侍従川(光伝寺の前を流れる川、照手姫投身のころ)小栗判官馬蹄の趾(称名寺客殿苑内)などがある。

東光寺の磨崖仏 釜利谷の旧東光寺趾附近にある磨崖仏で、大分磨滅欠損しているが、高さ数丈あり、関東ではまことに珍らしい石仏である。

塩焼場跡 野島の泥亀、平瀧附近、手子神社、侍従川口などは、むかしの塩焼場であったが、今はもはやその影もない。

白山古道 釜利谷から鎌倉へぬける古道で、ここに白山寺があったから、白山道という。人煙まれな好ハイキングコースとなっている。

北条氏一族の墓 金沢文庫および称名寺開基北条実時一門の廟所は、称名寺弥勒堂谷の奥づまりの山腹にある。なお二代顕時と、三代貞顕の墓は、文庫裏側の林間に、称名寺世代の墓は、金沢山々麓にある。

豊島氏父子の墓 富岡慶珊寺の裏山にある。この地の領主であった豊島明重、吉継父子の宝篋印塔二基を祀る。

墓の地藏様 富岡国道の西側、咳神様とともに並んでいる。豊島吉継が、母の慶珊尼の供養のためこれをたてた。もと地藏山の頂上にあつたもの。

咳神様 富岡の国通に沿うた小丘の上にある。今日もなお咳神様として近郷の人々に信仰されている。お礼に甘酒を奉納するので、その竹筒がしばしば下っている。

畠山六郎重保の墓 釜利谷六郎谷、六浦へぬけるトンネルの附近にある五輪塔。

畠山重忠の首塚 釜利谷の河原氏邸内にある。

上総介広常墓 朝比奈の切り通し道にある。広常は寿永二年梶原景時のために討たれた人である。

源範頼の墓 六浦瀬ヶ崎太寧寺にあつた。本堂裏の五輪塔で、首塚ともいわれる。いま太寧寺は、谷津の文庫駅裏西方の山麓に移っている。

夏島憲法起草遺跡 夏島は野島の先にある。もと烏帽子岩などあつて、この附近は景勝の地であつた。その後埋立られ、陸つづきとなつている。

明治二十年に、伊藤博文公が別荘を作り、ここで明治憲法の草案を起草した。いまその記念碑がたつている。もとは海軍の追浜飛行場で、現在は富士自動車工場の構内となつている。

八、金沢の伝説

青葉の楓 称名寺の金堂前にある。八名木の項をみよ。

美女石・姥石 称名寺阿字ヶ池の中にある。四石の項をみよ。

照手姫の傳説 照手姫が、横山の家から金沢に落ちのび、六浦の油堤で追手につかまり、川に投ぜられた。ところが、千光寺の本尊観音が身代りとなって救い出され、野島の漁夫の家にかくまわれた。生憎くその妻の嫉妬により再び迫害され、松の青葉でいぶし殺されんとしたが、再び観音の利益によって助命されたという。

放下僧の仇討 むかし下野の人牧野某の遺子二人が、放下僧に身をやって、父の仇を尋ねまわった結果、武州金沢の瀬戸神社で首尾よくその仇を討ったという話。

揚貴妃の珠簾

いまま金沢文庫に保管されている。はじめ尾州熱田神社の宝物であったという。古代ガラスの製品、梅花無尽蔵にみえている。

金沢猫と猫塚

おなじく梅花無尽蔵にみえる。北条実時のころ、唐船三艘が六浦に着岸し、一切経や青磁類とともに、唐猫を請来したといい、

六浦の千光寺に猫塚がある。

臍薬師

六浦瀬ヶ崎にあった太寧寺の本尊。永仁年間、この村の貧女が、亡父母の菩提を弔うため、糸を繰って臍としたところ、一人の童子が

現われ、これを買ってくれたので、幸い滞りなく父母の供養をすますことができた。これは薬師の靈験だったという。

荒痛文殊

釜利谷の禪林寺にあったが、後故あって江戸の浅草に移った。もとこの寺に文殊像があり、ある夜の大雨で土中に埋ったのを、後日に土人が掘起すと、土中から「荒痛や」と声があり、文殊が出現されたという。

塩なめ地蔵

朝比奈の切り通しから西に入るところにあった。いま鎌倉の光触寺境内に残っている。六浦から鎌倉へゆく塩うり商人が、この峠

で一休みし、この地蔵に一つまみの塩を初穂として奉ったといわれる。

長浜観音

称名寺内にある。応長のころ、津波で長浜の漁家が流失したとき、この観音が身代りとなって海中に沈んだ。後三十七年目のある夜

柴村の漁夫が、夜分海中から拾いあげた。この観音を、俗に貝付観音とも、海中出現の観音とも称している。

妙法と仁王尊

六浦の妙法日荷上人が、称名寺の住僧と碁をやり、日荷上人が勝ったので、その賭物である仁王尊をもらいうけ、甲州身延山に

負って帰られたという。

榎地蔵

洲崎町海岸よりの榎の下にある。水戸烈公来遊のとき、従者がその靈験を称したところ、烈公はこれを嘲笑して、海中に投ぜさせたが

これは後に、常陸の海岸に打上げられたものだという。

入定塚

金沢小学校近くの砂丘にある。延宝四年のころ、伝海という行者が生きながら埋められ、入定したところ。

芋明神

富岡長昌寺にある。寛永年中、村内慶珊寺の男茂右衛門が殺した蛇を、住僧の伝雅が厚く葬ってやった。その蛇が夢中に出現し、疱瘡

神として永く守護することを告げたのでこれを祀った。揚柳観音で芋明神といい、その池中には、寒中でも凋まない霊芋があったという。

うなぎの井戸

正確な場所はわからない。北条実時が病悩のとき、那智山の如意輪観音が現われて、うなぎ井の霊水を汲むことを教えられたと

いう。

金沢の福太郎 江戸時代、金沢の浜で、ある漁夫の夢に、童子が現われ、一社を建立すれば、水難・疱瘡の守神になるといい消えたので、伝来の箱をあけると、河童が入っていたという。甲子夜話に出ている。

九、海山の眺め

金沢の風光は、海によく、山によい。それは、海と山とが混然とけあって、その美しさを生むもので、ここに自然の巧まざるニューアンスがある。むかし、金沢の眺めは、能見堂、九覽亭、四望亭などがその代表であったが、いまはこれに代って、次の見晴し台がよいところとなっている。まず第一は、金沢文庫裏山の金沢山で、標高も高く、西は富岳をのぞみ、眼下に金沢一帯の街区を収めて、東南に三浦、房総の果てまで眺められるよい景色だ。頂上には、八角の観音堂があり、浅間様の小祠がある。それと反対に、南から東を眺めるには、金沢八景駅裏の権現山がよい。ここは、もと円通寺という天台宗のお寺があったところで、いまも遺跡が残っている。九覽亭を足下に、東方が開けて眺望はよいが、南北は山にさえぎられて、視界がせまい。

この外にも、光伝寺山（六浦）大観亭（金竜院の向い、泥牛庵の裏山）伊勢山（六浦長生寺横から上る。金沢第一の広大な眺めである。）塗桶山（谷津の白井の北、浅間山）など、いずれもそれぞれの特長をもった眺め場所となっている。

それからまた、峠のよさは、六国峠と朝比奈峠につきるといえよう。前者は、峯の円海山からと、能見堂から上る。はるか西方に、箱根・丹沢の連山をのぞみ、天園から鎌倉の瑞泉寺へと、半僧坊を通過して建長寺へ出る道とがある。朝比奈峠は、大道から鎌倉十二所へ出るコースで、先年新しく開拓され、バスも通っている。道の曲折も面白く、ちょっと熱海の十国峠を小さくした感じだ。

山から海へかけての、もっとも新しい眺めは、野島山である。ここは、眼下に乙艦の海と、平瀧湾、夏島を見くだし、金沢の町並も一目にみられて、展望がよい。ここは、最近横浜特別都市計画の金沢風致区となっていて、野島山公園として整備され、追々いろいろな施設ができてつづつある。

平瀧湾は、むかしから金沢八景の要^{かなめ}となつたところで、弁天島と瀬戸橋をとり入れた風景は、まことに静的で美しい。最近では竜宮館や、映画館などの娯楽設備ができた。

金沢の海を代表するものは、乙艦海岸で、野島から柴の出崎までをつなぐ曲汀である。いまは、寺前から野島運河の端まで、立派な海岸ドライブ

プウエイができ、近くバスが通うことになっている。海は遠浅で、家族づれでたのしめるよい海水浴場として古くから知られ、冬は海苔がとれ、春は汐干狩で賑う。また夏は、海のカーニバルもおこなわれて、鎌倉・逗子につぐ大海水浴場として繁昌する。

この海岸の北よりに、八景園ホテル・塩湯温泉があり、小柴よりに、金沢園のよい散策地もある。また小柴は、ひなびた美しい漁村風景で、これは長浜を通って、富岡の海につづく。富岡は、明治初年から海水浴場として知られ、海岸線は短かいが、海水清澄で、閑静な住宅地だ。

金沢の釣は、関東中によく知られた所であるが、野島や洲崎、柴などから釣舟がでる。セイゴ、黒ダイ、アイナメ、メバルなどによく、平瀧湾から大川にかけては、ハゼ、ウナギ、フナなどがよく釣れる。

一〇、新しい金沢

金沢は、古くて、しかも新しい町である。そして、多分に、明るい将来の希望にあふれた金沢である。むかしの金沢は、閑静な農漁村であり、保養遊覧の土地であったが、昭和五年、京浜急行が開通し、横須賀への国道が整備されたのを機会に、急に近代都市としての発展をみるようになった。

ことに、戦時中は、横須賀海軍基地の附属地帯として、航空技術支廠をはじめ、諸施設の建設が行われ、人口も増加し、土地の多くは損壊せられた。ことに戦後は、戦災をうけなかつたので、京浜の人々が一時におしかけ、今日では、人口六万六千八百人（今年三月一日現在）の都市となり、昭和二十三年五月から金沢区として独立し、今年で十年目を迎えることとなった。

金沢区役所は、区を中心街ともいふべき町屋にあり、富岡と釜利谷に支所をおいて、区の行政を司る。また治安を担当する金沢警察署は、寺前八幡社の横に庁舎があり、金沢消防署は谷津に本部をおいて、洲崎、六浦に支所がある。

この金沢は、むかし金沢文庫があり、古くから文教の地として知られているが、現在もこれらの教育施設が多く、内川に関東学院大学（経済学部、工学部）六浦には横浜市立大学（商学部、文理学部）県立社会教育会館（金沢町）などがあり、市立金沢高校（六浦）横浜高校（堀口）関東学院高校（六浦）のほか、金沢、六浦の二中学、金沢、文庫、八景、富岡、六浦、瀬ヶ崎、大道、釜利谷の各小学校がある。

これに加え、近代産業施設としては、県立工業試験所（昭和町）日本飛行機（昭和町）石川島コーリンツ（昭和町）富士自動車（野島）日平産業（堀口）日本製鋼（泥亀）東急車両（六浦）など多数の工場を擁している。

またこの外、近代施設を誇る県立長浜療養所（谷津坂）をはじめ、育成会谷津坂園、若草病院（平瀧）、追浜共済病院（六浦）、金沢保健所等の厚生施設、金沢電報局（谷津）、金沢、六浦、富岡、文庫等の郵便局もあり、金沢シネマ、キリン座、八景園温泉、竜宮館、赤井温泉、金沢レストハウス（八景駅前）などの、娯楽観光の施設もあって、まさに近代都市としての様相を呈してきた。

殊に、最近住宅地区としての発展はめざましく、富岡の京浜急行分譲地をはじめ、青砥、谷津坂、西柴にかけて、急ピッチで住宅街の建設が進められ、既設の泥亀、釜利谷の住宅集団につづいて、白山道にも公営住宅が続々できている。近くは、多年の懸案であった泥亀新田（蓮田）の埋立も近く実現することとなり、この中を、君ヶ崎——瀬戸橋をつなぐ国道の直線コースも計画されているから、いまにここが金沢の中心繁華街として、もっとも新しい盛り場となることであろう。この意味において、新しい金沢の進むべき道は、自ら明らかとなった。すなわち、金沢は、あくまで伝統ある古き歴史の町、文教の府としての精神を土台とし、この上に新しい産業を拡充し、住みよい住宅地として、観光と厚生 of 事業を充実させつつ、今後の発展を図って、立派な文化都市「金沢」をつくり上げねばならぬ。

金沢付近ハイキングコース

- (1) 八景一覽コース 文庫駅—称名寺—金沢文庫—金沢山—小柴—金沢園—乙鱸海岸—野島—洲崎—瀬戸神社—九覽亭—八景駅
- (2) 富岡コース 杉田駅—梅林—富岡海岸—長浜—小柴—以下(1)コース
- (3) 峯、能見堂コース 杉田駅—峯、円海山—山海園—能見堂趾—文庫駅—以下(1)コース
- (4) 湘南アルプスコース 文庫駅—能見堂—六国峠—鎌倉半僧坊—建長寺—鎌倉駅（または端泉寺に出る）
- (5) 白山古道コース 文庫駅—釜利谷—手子神社—白山寺の石仏—朝比奈峠—鎌倉駅
- (6) 六浦、峠コース 八景駅—六浦大道—朝比奈峠—十二所—鎌倉駅
- (7) 六浦、大船コース 八景駅—武相トンネル—笠間—大船—常楽寺—円覚寺—北鎌倉駅
- (8) 神武寺、鷹取山コース 八景駅—神武寺駅—神武寺—鷹取山—追浜駅
- (9) 霊場巡りコース 富岡駅—第一番長昌寺より順次前項で紹介した各寺院を巡る

Ⅲ 新しいのぞみ

(金沢区はいかにしたら発展するか)

—土地柄を生かすことこそ真の発展である—

街が発展するということはどういうことであろうか。新しい家がどんどん建ち、町はきれいになって商店には品物が溢れ、行き交う人に活気みなぎる街。ビルや工場が建ちならび、トラックやオートバイの流れは四六時中止む間とてない。農家の庭先さきには真新しいオート三輪車が置かれ、自動耕運機はうなり、船着場には積荷が山をなして日ねもすクレーンが活動している。いずれも発展している街の姿であろう。

このように発展している街の姿というものは、私たちの眼にはいろいろな形で映るのであるが、その本質はなにかといえば、その土地の性格、いかえれば自然的条件に恒久的に結びついた生々とした活動がそこにあるということである。そこでいま、金沢区の発展を考えるに当っては、まずその性格を正しく認識することから始めなくてはならない。

万葉集の歌には、国見ということが記されている。丘に登ってしげしげと国原を見渡せば、自らその性格も理解されようというものである。能見堂趾をさらに登って、砲台山に立ってみる。国見をするには格好の場所である。ここからの眺めは、どちらを見ても山また山、わずかに南の一角に平瀉を囲む平地が拡がっているが、その中へすら丘陵が割り込んでくる。まことにここは山国である。もともと山といってもさして高い訳ではなく、概ね標高百米前後の入り組んだ地形である。当然山畠は発達していて、奥まった山の上にも畠は見られる。昔は花卉が多くつくられていたようだが、近年はほとんど蔬菜である。それでもそうした畠には時に梅の老木などがあって、早春思いがけぬ香を流していることがある。

大体この地方は冬も暖く、ひどい霜柱をみることは稀で、山の植物相も暖地性である。雑木林が多く伐採も激しいので美林というほどのものはなく、杉、檜、松、の植林は稚いものが多い。従って動物相もあまり豊かでない。それでも冬は寒さを避けてきている野鳥は多く、小半日山を歩けば二十種にあまる野鳥を観察することができる。獣はいたってとほしく、わずかに野兔、野鼠、イタチなどがある程度である。山は歩くのに骨は折れず、殊に冬は明るい陽差しに小鳥の声を聴きながら、文字通り海の見える丘を歩くのは快適で、杖を曳く人も多い。

主な交通は海岸寄りを杉田から横須賀へ通ずる国道および金沢八景から岐れて逗子、鎌倉、大船へ通ずる道路、これらを走るバス路線、それに

この地区内に五つの駅を持つ京浜急行電鉄がある。

このように金沢区の大部分は山あるいは丘陵地で、こうした地域の産業はわずかに林業、山畠および谷地のわずかばかりの耕地に頼る小規模な農業のみで、畜産養鶏等は取り立てていう程のものはない。南北数軒にわたる海岸線も、その漁業の規模は小さく、海苔の生産にやや見るべきものがある程度である。鉄道沿線には杉田工業地帯の一部、東洋のスイスを目指した日平精密機械工場、東急車輛、日本製鋼、その他数種の工場が散在しているが、帝国海軍なき今日の立地条件は良好とはいえない。これに較べて市立大学、関東学院大学を始め高校、中、小学校は多くの学生生徒を擁してそのその活動は盛である。

このように見ると、この地の性格は天然の産物に恵まれた土地というのではなく、冬暖く夏涼しく、山あり海ありの理想的健康地で、しかも交通は東京、川崎、横浜、横須賀、逗子、鎌倉、大船へと四通しているという、住宅地として極めて優れたところであることが判る。

あちこちに貝塚が発見されているところから、古い時代にこの地に人が住んでいたことは確であるが、歴史に始めてその名が現われたのが日本書記である。下って十二世紀に入って鎌倉に幕府が開かれるや、その外廊地帯として重要さを増し、要人の往来もあつたようである。その名残りが称名寺であり金沢文庫である。そして北条氏の衰亡と共に一時淋びれ、江戸時代に入って再び文人墨客の来遊をみるようになったという。明治の初期には時の政客が憲法草案起草するため、しばしばこの地に集つたことは広く知られているが、そのゆかりの地も次第に変貌しつつある。

このようにこの地に人が心を寄せたということは、他でもなく、その気候が温和で風光に恵まれていることであつたので、そうした自然的条件は今日においても本質的には変つていないと思われる。広重の描いた金沢の風景は、今日とは違つてもの淋びた姿であるが、しかしその山水のただずまいは、今日のそれにいたく通ずるものがあつて驚くばかりである。ともあれ時は流れて、新しい金沢は昭和五年湘南電鉄の開通をもつて始まり、戦時にかけて帝国海軍との関連において遂次発展をみたのである。

このようにこの金沢の地の性格は、自然的にも歴史的にも人の住むに適した美しい所であることが特色で、物の集散によつて発展する商工業地ではないことは明らかである。このような場所へ工場を誘致し、商工業を發展せしめようと計つても、その効うすきことは火をみるより明らかである。自然的条件に根ざされない施設に恒久的發展を望むのは、所詮根無し草に実を結ぶことを求むることきものだからである。これはどうしても、この地の美しい自然を生かし、静かな、平和な、緑に包まれた理想的な住宅地区として發展せしめねばならぬ。

しかしどんなに自然的条件に恵まれた土地であっても、それだけで直ちに理想的住宅地となるのではない。道路、交通、電気、瓦斯、上下水道、治安、衛生、学校、商店、病院、公園、等々、およそ近代文化生活を営むに足る人為的施設がこれに伴わなくては、理想的な住宅地とはいえない。

そして、このような人為的施設は、文字通り人の為すべき事柄であり、それは住民の知恵と意志の所産でなければならぬ。

いうまでもなく、現在の金沢にもそうした施設がない訳ではない。が、果してそれは前述のごとき全区を挙げて理想的住宅地とするという理想に向つて、総合的に打ち建てられた計画に基いているところであろうか。少くともそうした計画に基いた適切な統制あるいは援助が行われているであろうか。いや、第一そういう計画が実在しているであろうか。なにより大切なことは、このように目標を明確に定めた、しっかりと計画を、最も民主的な方法によつて作り上げる、ということではなければならない。

巷間しばしば観光金沢の声を聴く。観光必しも悪くはない。が、現在の金沢に果して観光に耐える何があるというのであろうか。八景は形骸に過ぎず、文庫はただ歴史家の好事に止まるといったらいいすぎであらうか。まして広大な地域を劃して、ただ消費的な利那的享樂を追うごとき施設をなして人集めをするがときは、断じて有意義な観光とはいひ得ず、またそのようなものは決してこの地の本当の発展には寄与しないであらう。何故なら、そのような施設は土地の氣風を他力本願的な、寄食的なものに墮落せしめるばかりだからである。

かくはいうものの、土地は個人の所有が多く、その用途については他からとやかかいうことはできぬ、ということもあろう。しかし、その個人もまた地域社会の一員であるからには、公共の福祉、公共の目標を犯す自由が許されてよい筈はない。ただこの場合肝腎なことは、人をして公共の目標を見過ぎしめぬよう、それをどこに置くかを、民主的に、速かに、明確に定め、これを周知せしめて協力を得るようにしなければならぬ。そしてこのことこそ、区当局に果せられた重大な使命といわなければならない。

自然と人為の見事に調和した緑り深い金沢区、そして隅々まで便利で、健康で、平和な生活の営まれている理想的住宅地金沢区。その達成こそが本当の意味での発展であり、モデル地区として他からの観光客を招くに足る金沢区の姿であると思うのである。

金沢の歴史略年表

年(西紀) 年 号

主 な こ と が ら

今より四、五千年前から人が住んでいた。その遺跡として夏島貝塚、野島貝塚が最も古く、室ノ木、釜利谷青ヶ台貝塚、称名寺貝塚、寺前八幡裏貝塚などがある。

一一八五 元暦二、文治元年

一一八九 文治 五年

一一九一 建久 二年

一一九一 建久 二年

一一〇五 元久 二年

一一二八 安貞 二年

一一三〇 寛喜 二年

一一三〇 寛喜 二年

一一四一 仁治 二年

一一六〇 文応 元年

一一七五 建治 元年

一二七五 建治 元年

一三二二 元亨 三年

一三七六 永和 二年

一四二二 応永二十九

一四三八 永享 十年

一五六〇 永祿 三年

一五九〇 天正 十八年

一五九〇 天正 十八年

一六〇二 慶長 七年

一六六八 寛文 八年

一六九六 元禄 九年

源頼朝が瀬戸明神をたてた(伝)

このころ源頼朝が文覚上人と志をあわせ六浦の山の中に淨願寺をたてた(伝)

源頼朝が富岡の鎮守をたてた(伝)

源範頼が六浦瀬ヶ崎に菓師寺をたてた(伝)

畠山六郎重保が北条義時と戦い討死した。釜利谷のトンネル附近にある五輪塔はその墓といわれる(伝)

將軍藤原頼経が六浦に遊覧した

將軍藤原頼経が北条実泰、時房、泰時などと三崎磯山に遊覧したとき六浦から船でわたった

鎌倉と六浦間の道路を開く会議が幕府ではじめてあった

朝比奈の切通がひらかれ鎌倉街道ができた

このころ北条実時が称名寺(念仏宗)をたてた

北条実時が金沢を別荘の地と定めた。実時は称名寺殿と号した

この頃北条実時が金沢文庫をたてた(伝)

称名寺の七堂伽藍が完成した

足利義満が称名寺の寺領として称名寺内外敷地、塩垂場などをみとめた

称名寺造営のため六浦大道の常福寺門前に関所を置いて人は二文、馬は三文の税をとりたてた

関東管領の足利持氏が將軍足利義教に反抗していわゆる金沢合戦がおき、持氏はやぶれ翌五日金沢称名寺にのがれた

小田原の北条氏康、氏政父子が金沢文庫の蔵書「文選」を足利学校に寄附した

豊臣秀吉が称名寺、寺の前、海岸寺に乱暴狼籍、放火などの禁制をだした

徳川家康が江戸城に入り、金沢附近を代官原田佐左衛門に支配させた

徳川家康が金沢文庫の蔵書「群書治要」「春秋経伝集解」などを江戸の富士見亭文庫へ持ちだした

永島祐伯(号は泥亀)が走川および平潟の二ヶ所に新田を開いて、塩田二町歩、田十二石を得た、これが泥亀新田のおこりである

称名寺領以外の寺前村と瀬戸神社領以外の六浦社家分村、寺分村、平分村、釜利谷の宿村、赤井村の六ヶ村が米

一六九六	元禄	九年	
一七〇三	元禄	十六年	
一七〇七	宝永	四年	
一七二二	享保	七年	七月二十七日
一七四一	寛保	元年	十二月
一七七一	明和	八年	二月
一七七九	安永	八年	十月
一七八四	天明	四年	
一七八五	天明	五年	
一七八六	天明	六年	七月
一七九一	寛政	三年	八月 九日
一八四九	嘉永	二年	
一八五四	安政	元年	一月 十六日
一八五九	安政	六年	六月 二日
一八五九	安政	六年	
一八六五	慶応	元年	九月
一八六八	慶応	四年	三月 十三日
一八七一	明治	四年	十一月 十四日
一八七二	明治	五年	十二月二十一日
一八七三	明治	六年	六月
一八七三	明治	六年	五月二十三日
一八七三	明治	六年	五月二十六日
一八七三	明治	六年	五月二十六日
一八七九	明治	十二年	二月
一八八三	明治	十六年	
一八八五	明治	十八年	十二月
一八八七	明治	二十年	六月

倉丹後守昌伊の領地となつた

米倉丹後守昌伊が六浦引越さかいに陣屋をつくつた

金沢八景の勝景を心越禪師は漢詩で、京極兵部高門は和歌でほめた(伝)

幕府の元老酒井俣が牡丹を泥亀新田の永島氏におくつた(伝)

米倉丹後守忠仰が下野国皆川から金沢の陣屋にうつつた

永島段右衛門が平潟の海を埋立てるについて野島浦から支障がないという証文をいれた

代官久保田十左衛門が永島段右衛門に瀬戸の入江を埋立させるため関係各村立会の上で境などをさだめた

永島段右衛門が瀬戸入江埋立を幕府へ願出たので再度の調査により周囲関係九ヶ村は連名で支障のない旨の書状を出した

大飢饉があつた。この後寺前村の山田某が谷津の塩田を埋立て、大沢新田をつくつた(伝)

永島段右衛門が勘定奉行の許可をえて金沢入江新田の埋立をはじめた

関東大洪水があつた。このため金沢入江新田の新墾地がごとくおし流された

大風雨のため江戸湾沿岸に高潮があり、六代目永島段右衛門成郷が埋立した泥亀新田の堤防はことごとく流失した

九代目永島段右衛門忠篤(号は亀巢)が泥亀新田を完成した

アメリカ使節ペリーが軍艦七隻をひきいて、ふたたび浦賀沖にあらわれ、金沢小柴沖に碇泊した

横浜が開港になつた

このころ北川某が六浦に塩田をつくつた(伝)

外人の遊歩道が完成し沿道に外人専門の休憩所が設けられ、邦人名義で外人経営のミルクホールがあつたという

六浦藩主米倉昌言が横浜の取締を命ぜられた

鹿藩置界の公布により六浦藩が六浦県となつた

横浜、横須賀、浦賀、三崎、金沢間の郵便がはじめられた

富岡郷学校(富岡小学校のはじめ)ができた

三分学舎(六浦小学校のはじめ)ができた

知足学舎(金沢小学校のはじめ)ができた

赤井学舎(釜利谷小学校のはじめ)ができた

各小区会所をやめて各村に各戸長役場をおいた

金沢湾に「のり」養殖場ができた

はじめて村会が設けられた

伊藤博文が金沢に来て夏島に別邸をつくつた

一八八八	明治二十一年	六月	六日
一八八八	明治二十一年	九月	二十六日
一八八九	明治二十二年	四月	一日
一八八九	明治二十二年	四月	一日
一八九〇	明治二十三年	四月	一日
一八九〇	明治二十七年	十一月	
一八九四	明治三十年	五月	十一日
一八九七	明治三十二年	五月	十一日
一九〇〇	明治三十三年	五月	
一九〇〇	明治三十三年	五月	
一九〇〇	明治三十三年	五月	
一九〇三	明治三十六年	五月	
一九〇七	明治四十年	八月	二十三日
一九一〇	明治四十三年	四月	七日
一九一一	明治四十四年	十月	一日
一九一三	大正二年	五月	
一九二〇	大正九年	十月	一日
一九二一	大正十年	八月	十八日
一九二二	大正十一年	六月	十四日
一九二二	大正十一年	六月	十四日
一九二三	大正十二年	九月	一日
一九二五	大正十四年	十月	一日
一九二六	大正十五年	一月	一日
一九二七	昭和二年	四月	一日
一九二七	昭和二年	九月	三十日
一九三〇	昭和五年	四月	一日
一九三〇	昭和五年	八月	八日
一九三一	昭和六年	十二月	二十六日
一九三六	昭和十一年	十月	一日
一九三九	昭和十四年	七月	一日

憲法制定のため会談が東屋旅館で行われ、七月三十一日におわつた。この後は夏島の伊藤博文別荘に移された

今の洲崎町に武蔵金沢郵便局(普通郵便の集配局)がひらかれた

町村分合改称会令により富岡、柴、泥亀新田、寺前、洲崎、野島の八ヶ村は合併して金沢村となり三分村と釜利谷村が合併して六浦荘村となった。また峠村は東鎌倉村に合併された

金沢郵便局が郵便為替および郵便貯金業務をはじめた

このころ内務省勸業局が金沢湾に「かき」の養殖をこころみた

横須賀軍港拡張のため長浦の消毒所を移して長浜検疫所ができた

鎌倉町の一部であつた峠(今の朝比奈)が六浦荘村に編入された

このころ町屋の柴田氏が静岡県浜名湖附近からの蓮の種子を泥亀新田にうえた

洲崎の山口氏がトマト、パセリ、アスパラカスなど西洋蔬菜の栽培をはじめた

六浦荘村三分と逗子町間の県道路を改修してトンネルをつくつた

洲崎(三月)野島(三月)柴(五月)富岡(六月)及び三分(八月)の各漁業組合ができた

金沢村泥亀新田、屏風ヶ浦村間の道路改修のため富岡にトンネル二ヶ所を掘つた

製塩地整理の法律が公布されたので金沢、六浦の塩田が廃止された

三分、釜利谷間にトンネルができた

柴のトンネルができた

第一回国勢調査がおこなわれた。金沢村五、二二二人、六浦荘村四、二一九人であつた

相武自動車株式会社が八幡橋から金沢經由逗子間に乗合自動車の運行をはじめた

金沢村耕地整理組合が洲崎附近の旧塩田を埋立て集約的蔬菜栽培畑をひらく目的で設立を認められた

関東大震災がおきた。金沢村洲崎は震動を強く感じ全戸数一七三戸がほとんどたおれた。国道筋は亀裂を生じ地盤が約一米低下した

国勢調査がおこなわれた。金沢村五、四一〇人、六浦荘村四、三二六人であつた

金沢村が金沢町になつた

屏風ヶ浦村、大岡川村と目下村が横浜市に編入されたので久良岐郡は金沢町と六浦荘村だけとなつた

金沢町耕地整理組合がサンドポンプを使用して平潟湾の土砂で十九町歩余の埋立工事を完了した

黄金町、浦賀間と金沢八景、湘南逗子間に湘南電気鉄道が開通した

金沢文庫(県立図書館)が開館された

京浜電鉄の横浜駅、日の出町間が開通、湘南電鉄との連絡が完成したので乗合自動車連絡は廃止された

金沢町と六浦荘村が横浜市磯子区に編入された

金沢地区の町界、字界の変更、町名、字名の改称および地番の更正があつた

一九四四	昭和十九年	四月	一日	釜利谷町に釜利谷国民学校、六浦町に大道国民学校が六浦国民学校から分れてできた
一九四四	昭和十九年	十一月		野島、室ノ木間に八紘橋ができ渡船が廃止された
一九四四	昭和十九年	十一月		相武隧道が完成し金沢、大船間の新道が開通した
一九四五	昭和二十年	六月	十日	空襲により富岡南部に爆弾が投下され、家屋全壊五九戸、全焼一二戸の被害があつた
一九四七	昭和二十二年	五月	一日	学制改革により国民学校を小学校と改めた
一九四七	昭和二十二年	十月	一日	臨時国勢調査が施行され磯子区役所金沢出張所管内の人口は四八、九三六人。一一、一二八世帯であつた
一九四八	昭和二十三年	五月	十五日	金沢区が磯子区から分れて独立した
一九四九	昭和二十四年	六月	一日	横浜市大商学部が開学された
一九五〇	昭和二十五年	六月	三十日	横浜市金沢保健所ができ
一九五〇	昭和二十五年	八月	一日	横浜市金沢民生安定所が金沢区役所内にできた
一九五一	昭和二十六年	四月	一日	横浜市立金沢高等学校が六浦中学校々舎の一部を借りて開校した
一九五一	昭和二十六年	七月	五日	横浜市立八景小学校が泥亀町に横浜市立文庫小学校が寺前に金沢小学校からそれぞれ分離開校した
一九五一	昭和二十六年	十月	五日	横浜市金沢警察署が磯子警察署から分離独立した
一九五二	昭和二十七年	十月	一日	横浜市金沢消防署が磯子消防署から分れて独立した
一九五三	昭和二十八年	五月	十五日	金沢区発足五周年記念式典が挙行された
一九五四	昭和二十九年	十月	二十日	県立工業試験所が富岡に開設された
一九五四	昭和二十九年	十二月	一日	県立長浜療養所が結成した
一九五五	昭和三十年	十月	一日	第八回国勢調査が実施され、人口は六三、九七四人。一四、二五五世帯であつた
一九五五	昭和三十年	十一月	二日	富岡射撃場へ天皇、皇后両陛下が台臨された
一九五八	昭和三十三年	五月	十五日	区内の広区域にガスがひかれその火入れ式が行なわれた
一九五八	昭和三十三年	五月	十五日	金沢区制十周年記念式典が挙行された

編集後記

この発刊計画が決定したのは、二月になつてからで、三月中に資料の蒐集を終え、編集して、脱稿しなければならなかつた関係上、金沢文庫長の熊原氏、瀬ヶ崎小学校長の花方氏には、御多忙中特に非常な短期間で、まとめて戴くとゆう、無理をお願いいたし、またページの制限など申し上げ編集子としては、まことに厚顔至極でした。

内容についても、ことに区の歴史をもつと具体的に登載する計画でしたが、結果としては、ご覧のとりの概略に、終つてしまつた次第です。しかし今回蒐集した資料を基礎として、あらためて発刊できればと、願つています。

資料の蒐集にあつて、横浜史料編纂室、金沢文庫、区内寺前町の川島一美氏をはじめ、多くの、かたがたの、ご協力を深く感謝いたすと共に厚くお礼申し上げます。

以上のような次第で内容についても、ご不審な点もあるかと思いますが皆様のご寛容と、ご指摘を賜れば、編集子としても幸に存じます。

かなざわ展望

昭和三十三年五月十日印刷
昭和三十三年五月十五日発行

【非売品】

発行者 新井助太郎

編集者 金沢区役所戸籍統計課

印刷人 杉本盛太郎

印刷所 杉本紙器印刷株式会社

横浜市南区白妙町二ノ七
電話港局(8)一〇九二五番
〇〇九二六番

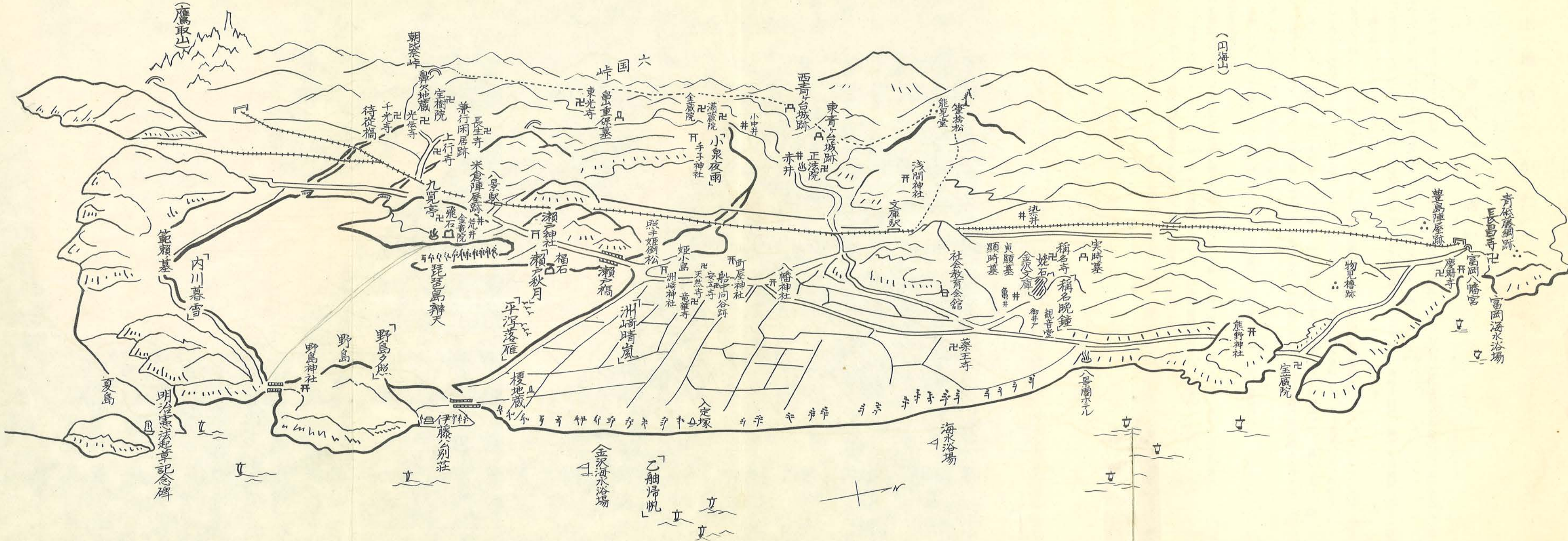
発行所

横浜市金沢区町屋町二〇番地

金沢区役所内

金沢区制十周年記念祝典委員会

金沢案内図



仙臺松島海峽

